

平成29年(西暦2017年)12月

瞑想録(その23)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

この一連の瞑想録の主題は、「素朴な疑問と意外な気づき」です。誰もが当たり前だと思っていることを懷疑しおよそ人が気付かないことに気づこうという、自己流哲学の瞑想集です。ちなみにこれは科学でも学問でもありません。強いて分類すれば随筆です。科学が万能だとも思っていませんし、科学でない最大のポイントはここのあまたの思い付きについて証明を一切していないことです。私は、世の中には実は現状よりもずっと面白くて自由な物があるはずで、現代人はまだ十分にその視野を広げていないと信じています。

なお内容は気づいた順に並んでいるので、一見ランダムで読みにくいかもしれません。またこの論集の一連は下記のサイトに全部収容してあります。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

<https://sites.google.com/site/mubaku133/>

さらにこの一連の論集は下記のブログの主要記事を集めたものです。

<http://blogs.yahoo.co.jp/oseh13>

2017. 10. 22

## 1、東芝崩壊の真犯人

この記事を書いている間に、当の西室泰三さんが亡くなってしまった。とりあえず哀悼。

最近東芝をダメにした「元祖A級戦犯」として、東証の理事長を経て最近まで日本郵政の社長と格上だった西室泰三氏を上げる声が出ている。西室さんは近年こそ「財界天皇格」だったが、元祖粉飾の西田元社長を選んだその前任社長がこの西室さんだ。

そしてその西室さんだが、彼自身がそもそも従来 of 慣例を破って東大卒でもなければ技術系でもなく、かつ傍流の海外販売畑出身だ。しかも当時の副社長や専務を飛び越しての、大抜擢だったと言う。言うことは戦犯の大元は、そもそも西室さんを社長に指名した当時の会長だということになる。



## 瞑想録(その23)

その会長とは青井舒一さんだが、この人は前任の渡里杉一郎さんがココム事件で途中辞任したために、急遽社長になった人である。ただ西室さんが抜擢された今から25年くらい前の平成当初期は、ポストバブル期の真最中でどこの会社も緊縮財政、発想の根本的変革を求める社会的雰囲気があった。

「長期的開発よりも販路拡大を」と叫ばれた時代であり、時代性を考慮すればこの抜擢が「まるで荒唐無稽だった」とまでは言えない。ちなみに私の属している会社も東芝のような大きな会社ではないのだが、やはりこのころに「ポストバブルの見直し機運」があった。

すなわち技術畑の役員が率先して、「こんな技術は開発できても売れないだろう」とか「戦後の日本の復興を見れば分かるように技術など開発しようと思えばすぐなのだよ」などと言って、開発プロジェクト潰しのお先棒を担いだものである。同業のソニーでも、このころに似たような人事があった。

ただ西室さんが最近批判されているのは、大東芝の社長になったにもかかわらず社内全体を等しく見ようと言う志が低かった点だ。もっぱら自分の古巣の海外販売で華々しくやることばかり考えていて、技術を見ようとしなかったと言われている。

その結果として技術開発が停滞したのみならず、究極にその心構えがやはり傍流の西田社長の選抜に至ったのだと指摘されている。言わば構造的な欠陥が招いた必然的な失敗だったと言う訳だ。現にこの人は日本郵政でも海外買収をぶち上げて、結果として数千億円の赤字を出している。

東大をはじめ一流大学卒が掃いて捨てるほどいる大東芝で、「どうしてこの程度の人材しか見いだせなかったのか」という疑問もあるだろう。だが東芝の千倍も人がいる米国の先の大統領選挙でさえ「ヒラリーvs トランプ」で、「こんな貧しい選択しかないのかよ」と言われたではないか。

結局民主主義や競争主義と言っても、共産主義よりはましかもしれないが、やはり「きっかけとか弾みとか巡り合わせがすべてを支配する」みたいな面がある。選択の幅は意外と狭くて、ベストをチョイスするのは意外と難しい構造なのだ。結果論かもしれないが西室さんに必要だったのは、不得意分野も含めて社内全部を公平に見ようと言う謙虚な精神と、それを可能にする地あたまの良さだったのではないか。



## 瞑想録(その23)

そもそも社長とか経営陣と言うもの、どの分野の人がトップに上がろうとも必ず非経験分野はある。端的に言えば文系出身者は技術に弱いし、理系出身者は財務や法務に弱いものだ。だからこそそこで謙虚にバランス感覚を出そうという努力こそが、すべてのトップの必要な心構えなのだ。

もちろんほとんどの会社では、たとえ雇われ経営陣と言ってもこの方向で努力していることだろう。皮肉なことだが、アベノミクスの規制緩和で潤ったのは一般市民でなくて企業の社内留保だったと言う。経営層と言っても所詮は雇われサラリーマンがせつせと会社に貢ぐ姿は、哀れですらある。

私は産業界の裏までは知らないが、一例を挙げれば住友林業と言う会社、財閥系ではあるけれども社員は東芝の10分の1くらいの会社である。お世辞にも総合とかゼネラルと言った枕詞は付かない。そして業務の態様上社員は、①海外木材買い付けと言う外交官的社員と、②国内森林保護と言う泥臭い社員の、混成部隊である。

外交官と土方、これらのセンスやその統合は自衛隊の陸軍と海軍以上に難しいと思われるところ、聞くとところによるとトップはどっちの側から出るにしても社内融和に腐心していて、実際今までに社内抗争のような問題を起こしていないと言う。

だったら東芝のトップだってやる気さえあれば、似たことができたはずだ。これをやらずに経団連会長の座を狙ってスタンドプレーに明け暮れていたとしたら、指弾されても仕方ないだろう。今西室さんに批判が行くのはそう言うことである。

この人は生涯運の強い人だったが、最も強い運は本格追及される直前にタイミングよく死んだことかもしれない。

## 2、文明批判の批判

私はしばしばこのブログで、文明批判的な記事を書いている。今の教育の西洋的・キリスト教的偏向に対する批判とか、「未開民族の方が人として自然で、欧米先端文明こそ鬼子であだ花だ」と言った指摘だ。

その結果しばしば、学生時代にはさぞ成績が良かっただろうと思われる「常識人」たちに、批判を受ける。その批判とは究極すれば、「文明の成果であるブログを使って文明批判をするのは矛盾だ」と言うものである。確かに矛盾ではあるし、ことさらに反論する気もない。だが一応当方のポジションを、表明しておきたい。



## 瞑想録(その23)

先にも指摘したように、先端文明の目もくらむような大成果それ自身は歓迎すべきだ。だがその発端は多分にキリスト教を揺籃とした「反常識が最も生産的だ」と言う、人を小ばかにしたような人生訓の庶民への浸透にある。そして庶民まで浸透した結果、天才でなくても人工的に大砲を作り病気を治し大都会を作り世界を植民地化しと、大衆力のマスパワーで今日まで来た。

その恩恵には感謝すべきだ。だがその発端から始まってすべてが鬼子でありあだ花である以上は、それになじむのが人として自然な方向ではない。むしろ単に使い尽くせばそれで十分な代物なのだ。もし興味が沸いた人は「研究」を進めればよいが、私のように興味の無い人は単に使い切るだけだ。

私のライフワークは、「素朴な疑問と意外な気づき」をキーワードとする瞑想である。瞑想だから考えるだけで証明はしない。瞑想結果を信じるか否かは、多分に読者個々の個人責任である。気に食わないなら信じなければ良いだけのことだ。

瞑想と言うと普通は、洞穴の中に一人こもって寝食を忘れて孤独に座禅をし続けるイメージだ。だがこれはイメージとしては格好良いものの、蚊が刺しまくりトカゲがはい回って面倒な上に不潔極まりなくて、いつ病気になるかもわからず、実は多分に現実的ではないのだ。

そして私は「現にある便利なものは自由に使いつくす」との立場から、水洗トイレとエアコンの付いたマンションの一室でもっばらこの瞑想と記録活動を実行している。何等の矛盾も感じないし、これらの機器を発明した人への感謝の念もない。彼らはノーベル賞や給料で別途報われているから、それで良いのだ。

似たような意味で、かつて私は南洋群島に憧れたこともある。あの地域では気候が良い為に食べ物自然に生えてきて、働く必要がないのだ。つまり好きなだけ自分の趣味に没頭できる。ところが詳しく調べてみると、未開民族は一般にプライバシーの概念がなく、日本の農村のように隣近所がうるさい。残念だがこれでは良い瞑想はできない。

私自身はアニミズム志向で東洋哲学に愛着を感じている。だが利用しつくすと言う観点からは、こと医療に関しては矛盾なく西洋医学と合成薬のお世話になっている。西洋医薬に副作用があることを知りつつも尚である。理由は一言で言えば西洋医学の方が現実的だと、自己責任で信じているからだ。そして信じた以上は私が間違っていて、医療過誤で殺されても恨まない。



私が文明に疑問を感じたのは、ちょうど大学に入ってからである。大学が単に「文明を教授するところだから」と言う理由もあった。だがちょうどこのころに自分が成長して人としての本来の、「野生のふるさと」に目覚めたと言うのが実際の所だろう。

一度目覚めてしまった以上は、学問だろうが会社の仕事だろうがすべて自分の信条に反するのだから、やる気が出るはずがない。何気に同様なことを感じている人は、潜在的には結構多いようだ。結局皆さん無意識に自分を殺して、無理に社会に適合しているのではないか。

本当の偉大な知恵とは、ノーベル賞とか微積分とかではない。原住民の長老や酋長が経験で体得したような、波と風を見て航路を定めたり網を下ろしたりするような、六感をフルに使って全身で感じるような「見抜く知恵」だ。このアニミズム的勘が皮肉なことに、文明によって抹殺されている。

本当の知恵がないがしろにされると言うことはすなわち、「現代文明は実は反文明的だ」と言うことだ。病気で死ぬ子供は減ったかもしれないが、人々は目先の利益や競争に明け暮れて互いにつぶし合い、結局誰一人幸せになっていない。

この本来の人としての幸せを取り戻すのにすでに開発された技術を有効利用することに、そんなに罪悪感が必要であろうか。

### 3、法人の一体性

今色んな意味で話題になっている総合電機メーカーの東芝について、「もう潔く逝っちゃってください」と言う人々と、「土俵際でもががんばれ」と言う人々の、大きく2派に分かれる。

その中で自称「秋葉系アナリスト」で「B級マニア」の森永卓郎さんが、「東芝ってテレビとか洗濯機とかいっぱい良いものを作ってくれたでしょう、だから何とか残って欲しいと応援しています」とコメントしていた。B級マニアらしい応援理由だが、その時私はふと変に思った。

東芝がテレビや洗濯機を作ったのは、もう半世紀以上も前のことだ。その時とは社員が全員入れ替わっていて、見ようによってはむしろ「別の会社」だ。それを「同じ東芝」と認識させるその根本思想は、一体どのような構造だろうか。



## 瞑想録(その23)

これは単に「会社名が同じだから」と言った、安易なものではない。ちなみにこの会社、洗濯機等の当時は「東京芝浦電気」と言う「違う」社名だった。「入れ替わってはいるが徐々に入れ替わったから」とか「社是とか社風とかは一貫しているから」、これらの理由はもう少しましに聞こえる。

では視点を変えて、日本と言う国家はどうだろう。終戦の前後で君主国から民主国に代わった。ガラッと変わったのだ。同じ日本だろうか違う日本だろうか。これは価値観にも寄るが、「同じ日本」と認識する向きが多いように思う。理由としては「民族として同一だから」とか「基本的な精神構造は受け継がれているから」とかだ。

実際に「違う国だから戦前の負債は受け継がない」と言う論理は、国際社会では通用していない。ただ共産革命後のロシアのように「帝政ロシアの負債は一切受け継がない」と宣言して、そのままとぼけ通してしまったような例もある。

では朝日新聞はどうだろう。戦前は「戦争イケイケ」だったのが、敗戦後はまるで反日赤新聞になっている。この場合は「同じ朝日新聞」だろうか、それとも「名称だけ継承した別の新聞社」と見た方が良いのか。難しいところだ。世の中には、何らのきっかけで社風を大きく変える会社も結構あるからだ。

AKB48はどうだろう。もう3回転くらい卒業を繰り返しているが、多くのファンが引き続いて応援している。やはりファンとしては一体物に見えるのだろうし、プロデューサーの秋元康さんもまたメンバーも、連続性があるように気を使っている。

なぜこのような話を羅列するかと言うと、論理学の世界には「テセウスの船のパラドックス」と言う逆理があって、それとの関係だ。この逆理は、「船を順次修理していったる日全部品が新調されたとする、それではどこまでが元の船か」と言う問いである。これは答えるのが難しい。

ただこの逆理の前提として、論理学者は余り指摘しないのだが、「全部入れ替わった時点で別のものである」と言う暗黙の仮定が置かれていることに注意したい。これに対して冒頭の森永さんは「何回入れ替わっても同じ船」と、世界に名だたる論理をぶち壊すようなことを言って平気である。これはなかなかできない、恐ろしいことだ。

だが恐ろしいとはいいながら我々は日常結構に、森永さんと同じ発想をしている。そもそも人間だって10年たつと細胞は全部入れ替わるのだから、逆理と同じ前提なら



## 瞑想録(その23)

別の人だ。それなのになぜか「同じ嫁様」として何十年も付き合っ、ことさらに問題視しない。

と言うことはテセウスの船のパラドックスは、実は空の論理だったのであろうか。そう簡単には決めつけられない。現に森永さんの冒頭の応援演説に違和感を持つ人や、素朴に違うと思う人も結構居るのだ。「同じ東芝っていう言い方、理由にならないよな」と言われれば、それはそれでそう思うだろう。

だから今回の瞑想の結論として言えることは、テセウスの船は全面的に意味があるとも言えないが無いとも言えない。むしろ「もっと広い意味での問題を提起している」と考えるべきではないか。諸行無常、万物流転の世の中にあってどこまでが同一でどこからが違うか、これは依然として「ここ」とスパッと切れない問題なのだ。

こういう問題は身近にも結構あって、例えば高血圧についてどこから高血圧として服薬対象にするか。今は一応140で切っているようだが、血圧140辺りに顕著な段差があるわけではない。だから139だと服用不要で141だと服用と言うのも、患者としては割り切れない気がするのだ。

別の例としては特許の有効期間は出願から20年だが、「どうして23年4か月ではいけないの」と聞かれても単に「切りが良いから」くらいの理由しかない。1票の格差が何倍なら違憲か、これだって裁判官としては切りようのない、裁判官泣かせの問題だ。

こう見ていくと東芝応援一つをとっても、多様な側面を有することが分かる。

## 4、意味理解の境目(その2)

### <文例1>

さてこの庭園は神田川に面していて、私がこの10年でやった主な趣味を、自発的に説明などしてあげました。おばさまたち数人の団体が先に来ていて、記念館の隣にある関口芭蕉庵に寄りました。かつてこの川の護岸の改修工事は、街歩きと俳句だったので、やはり初訪問です。記念館を出た後も、俳句同好の人々の聖地になっています。ここにも寄ることとしました。そして芭蕉の供養塔まで来ると、庵(いおり)と庭園があって、俳聖の芭蕉が2年ほど関係したと言うことです。

意味が通ると言うか通らないと言うか、雰囲気としてそれなりに分かるものの今ピンときませんね。その主な理由は、時系列が見えてこないせいです。つまり直前の前



## 瞑想録(その23)

の文章が、続く文章の導入になっていません。加えて説明の滑らかさが足りなくて、不自然です。

この例文は実は以下の正文の、順序をあえて混ぜて作ったものです。こちらなら普通の日記として、難解な部分なく意味が通ります。主題は共通ですが情景は微妙に違ってきますね。

さて記念館を出た後は、記念館の隣にある関口芭蕉庵に寄りました。やはり初訪問です。この庭園は神田川に面していて、かつてこの川の護岸の改修工事に俳聖の芭蕉が2年ほど関係したということです。庵(いおり)と庭園があって俳句同好の人々の聖地になっています。私がこの10年でやった主な趣味は街歩きと俳句だったので、ここにも寄ることとしました。そして芭蕉の供養塔まで来ると、おばさまたち数人の団体が先に来ているので自発的に説明などしてくれました。

### <文例2>

喧嘩しあってひきつっているのを見てください。あるいは隆起や陥没したがつているとか、目と目が実は離れたがつていることに、気づきませんか？気づきませんか？たまたまあなたの横にいる人物や、実際に彼の絵や、逆に鼻が指を呼び込んでいることに、顔全体の個々の部品が行儀よく座しているどころか、見えないでしょうか？

この文章も雰囲気的に多少は分かるものの、今一ピンときません。今回の理解困難の主要な理由は、論理順序がでたらめなためです。併せて滑らかさが足りなくて不自然です。この文章も下記の文章の、順序を混ぜて作ったものです。

実際に彼の絵や、たまたまあなたの横にいる人物を見てください。目と目が実は離れたがつていることに気づきませんか？逆に鼻が指を呼び込んでいることに気づきませんか？顔全体の個々の部品が行儀よく座しているどころか喧嘩しあってひきつっている、あるいは隆起や陥没したがつているとは見えないでしょうか？

冒頭の文例よりは理屈を書いていて理解に努力が要りますが、これなら言いたいことが理解できるでしょう。

### <文例3>

目と目が実は離れたがつていることに、おばさまたち数人の団体が先に来ている、見えないでしょうか？2年ほど関係したということです。たまたまあなたの横にいる、や



## 瞑想録(その23)

はり初訪問です。喧嘩しあってひきつっている、この川の護岸の改修工事は、個々の部品が行儀よく、私がこの10年でやった主な趣味に、気づきませんか？

今挙げた2文例をさらに混ぜてみました。もう理解は絶望的です。マクロな主題が見えてこないからです。

### <文例4>

パンダの桜に蹴りを投げたら、飛行機の海が効いて混同が光った。

この例文は文法的には合っているのですが、単語並びがめちゃくちゃすぎて、何を言いたいのかおよそ分かりません。経験の集積結果としての適用できるテンプレートを、どれだけ拡大しても持ち合わせていないからです。天才ならあるいは彼なりに分かるのかもしれませんが。

さてここで似ていても分かる場合と分からない場合があると言うことは、特にわかる場合についてそこに何らかの法則があるということになります。ただその法則は元が言葉で、数字のように規則的でないので、多分にケースバイケースになってしまいます。

続いてもっと究極的に、文章でなく論理の場合を見てみましょう。

### <論理例1>

忘れたと言うことは、一度は走ったと言うことだ。

これは果たして論理ですらあるのでしょうか。実はオリジナルの論理は下記のようにです。

忘れたと言うことは、一度は覚えたと言うことだ。

これなら完璧に論理ですし、意味的に絶対真です。

今日会社を休んだと言うことは、常時は会社に行っていると言うことだ。

これも似たような、絶対真の意味論理です。

### <論理例2>

どうして何も飛ばないうちから、お茶の間だと分かるのでしょうか



## 瞑想録(その23)

これも論理か否かですら、見当もつきません。オリジナルな論理は下記の通りです。

どうして何も聞かないうちから、間に合っていると分かるのでしょうか

これなら論理であり、かつ意味的に絶対真です。

一般に論理の場合が平文の場合よりもちょっとした捻りに弱くて、許容範囲あるいは冗長度が低いですね。まあ論理と言う性質上当然ですが。

### 5、4年目のアベノミクス

「アベノミクス」が流行語大賞を獲得してから4年目が、そろそろ終わろうとしています。少しは景気が良くなったのでしょうか。まあ就活生は、それなりに喜んでいるようです。

最近JR九州が、「贅沢列車を増発させる」と発表しました。この万年不景気な時代にあって、いかにも威勢の良い話です。一言で言えば「カシオペア」とか「ななつ星」とかそう言ったつまらない、露骨な金取りビジネスに進んでカモになる小金持ちジジイが、後を絶たないと言うことでしょう。

「クルーズ船世界一周」とか「ドバイに別荘」とかにはとても手が届かない程度の小金持ちジジイが、今の日本には結構山ほど居る。そしてこの手の「しみったれ贅沢」が、こう言う小物ジジイ達の都合の良い金の捨て先になっていると言うことです。

この手のジジイの原資である退職金こそ取り上げて、それこそ進学もままならない母子家庭とかに呉れてやれば良いのです。でもそう言う、「その小金持ちジジイが散財してくれるからこそ経済が回るのだ」と言う種類の反論をする人が必ず出ます。

これはいかにももっともらしい、危ない理屈の典型です。昔もこういうことを言う人がいて、「役人への賄賂だって、彼らがそれを使って経済を回すから良いことだ」と言った、教科書クラスの有名人が居ました。でもこの理屈なら、「暴力団のみか締め料だって経済を回すから良いことだ」と、なってしまいませんか。

そして同じ経済を回すのなら、母子家庭の子弟が進学の為に使ってくれた方がよほどに「生きた金」になるのではないのでしょうか。これが本当の正しい理屈です。理屈はいつももっともらしく聞こえますが、大抵の場合は事物の一面しか捉えていません。



## 瞑想録(その23)

要するに、「得になる真実は言うが損になる真実は黙っている」と言うパターンです。先日もモツ煮屋の前を通ったら、「色んな味を同時に楽しめます」と宣伝していました。これ自体は嘘ではないですが、それでもモツが嫌いな人は騙されません。

この例などは見え透いているので直感的に見破れますが、世の中の金もうけ屋たちはもっと巧妙で、何とか口先でお金を手放させようとします。投資会社も「低金利の今こそ投資を」などと煽っておいて、損をしたら「ハイさようなら」です。まあ騙される方が悪い面もありますが、詐欺に近いですね。

「当店は国産野菜を使用しています」、これって「外国野菜は使っていません」ということを必ずしも意味しません。「当店は国産野菜のみを使用しています」、これだって肉は中国産かもしれないのです。こういう頓智の悪知恵みたいな宣伝が、最近ますます増えたと感じます。

お役所や補助金ビジネスでない純粹の営利企業は、自分の給料くらいは自分で稼がないと誰も出してくれません。ですから自然とぎりぎりの嘘でも、「バカからせつせと取り上げるのが正義だ」と言う社風になっているのでしょう。そしてその成績が良い人ほど、偉くなっていくのでしょう。

ところで半世紀前の経済成長期に日本は「一億総中流」と言われ、これが問題だとされてきました。ところが今は日本も貧富の差が開いてきて、今度はこれが深刻な問題だと言われています。一体どちらにしろと言うのでしょうか。大衆もマスコミも、無責任に言いすぎで煽りすぎの面があります。

では本題に戻ってアベノミクスは単純に、この手の「バカから取り上げるだけの商法」なのでしょうか。最近のニュースによると、アベノミクスの規制緩和によって企業の内部留保が大きく積み上がったそうです。要するに「越後屋みたいな奴らが私腹を肥やしているだけだ」と言う訳です。

これなど経済の回転にすら役立たないという意味で、その品位や価値はみか締め料以下だと言えます。これでは好況感が出るわけがありませんし、「アベノミクスは一部資本家のためにあった」と言われても、反論できません。

しかもこういうニュースが出るとすぐに、「内部留保は金だけじゃない」みたいな反論記事が出てきます。でも仮にそれ自体は事実だとしても、企業への反感を薄めるための提灯記事だとしたら、これは限りなく意図的なチートでしょう。



## 瞑想録(その23)

街角経済的にはアベノミクスで変わったことと言えば、ラーメンが1000円にそして牛丼が500円になって、しかも店員の質が落ちただけです。「三本の矢」の民活も安倍さんのせいではないとはいえ、東芝、日産、神鋼等大企業が枕を並べて討ち死にしている、せっかくの円安にもかかわらず海外から全然儲けていません。日本のお家芸だった製造業はもはや全滅しています。

平均株価が21年ぶりの高値を記録したと言う、「明るい」ニュースも耳にします。でもこれも事象の根拠が薄くて、逆に怖い感じすらします。思うに日本は浜矩子が言うとおりに、どうあがいても老いるしか結末はないのです。ですからアベノミクスの悪い点は、さも夢があるように語るところではないでしょうか。

ありえない夢を語るよりも、ソフトランディングの方法をこそ提案すべきです。アベノミクスの最大の間違いは、「もし日本だけ頑張って他の国がサボっていたら」と言う暗黙の前提の上に胡坐をかいていることです。こんなことがまかり通るなら、相撲取りだって全員が全勝優勝できてしまいます(笑)。

4年目も終わりを迎えて人々に飽きられているアベノミクス、でもまあ取り得る手段としてはまだ最善だと言うところが、日本のつらいところです。

### 6、恐怖の判官贔屓

先日にも衆議院選挙が終わった。与党が3分の2を確保して、安倍さんの本命だった改憲論議が本格化するだろう。海外の論調も専ら、改憲に対する期待ないしは懸念一色である。

だが私として最もインパクトがあったのは、枝野一派の崖淵での息の吹き返しだ。明らかに学生運動崩れでかつ反日で、外国人(在日等)への選挙権付与を明言している。立憲民主党とは言いながらその実は「真正共産党」が大幅議席増とは、日本の将来は大丈夫だろうか。

しかも今回特に性悪なのは、枝野の息の吹き返しに小池さんもそして本人さえも思いもよらなかった、まさかの判官贔屓(ほうがんびいき)という、日本人の大衆に染み込んだ理不尽な情緒によってなされたことである。これはもう日本も、親北の韓国政権を笑う資格はない。



## 瞑想録(その23)

判官鼯鼠、ここで判官とは悲劇の武将である源義経である。「日本人は不当にいじめられる者に格段の肩入れをする」という、独特の精神構造を示している。こういう現象は外国にも、リア王とかジャンヌダルクとかデイビー・クロケットとか多少はあるものの、彼らの主流は合理主義である。判官鼯鼠は日本特有の心情と言える。

いじめられるものの味方と言うとさも正義感のように聞こえる。そしてこれが常に正常に作動するなら正義感そのものであり社会正義の作動装置と見られないこともない。だが実際は特定の場合しか作動しなくて、かつ一旦作動すると炎上するという性格を持つ。現に学校のいじめとか、きわめて陰湿なのに鼯鼠もなければ、現になくならないではないか。

では学校のいじめはなくなるのに、なぜ遥かに不要な「枝野いじめ」が逆転して鼯鼠になったのか。思うに鼯鼠の心情とは、①強がるものを生意気だと嫌う反発の気持ちと、②弱い者を助けると言う偉い自分の姿と、③助けても自分は返り討ちに遭わないと言う安全、これら3条件が揃った時に初めて作動するようだ。

学校のいじめの場合は、3番目の条件が危ない。また強制的に排除された舛添がどれだけ立派なことを言おうとも、「ひっこめ嘘つき」の大合唱しか聞こえずに、鼯鼠は全く出てこない。敗戦の責任を負わされて絞首刑になったA級戦犯にも、判官鼯鼠は発生しなかった。

これらの条件を見ると分かるように、判官鼯鼠は必ずしも高い精神のみでない。理不尽な自己陶醉や一種の民間信仰も混じっているようだ。ここが日本特有と言いながら、武士道と異なるところである。そしてその特徴の極めつけは、この救済行為が本質的に庶民的であることの反映として、他人のためでなく自分のためだと言うことだ。

他人のための鼯鼠ならあるいは偉いだろうが、究極的には自分の気が済めばよいのである。だからいじめられている側にある人物がどんな思想心情を持っているかとか、なぜいじめられるに至ったか等は、鼯鼠の作動にほとんど関係がない。今回も枝野がどういう人物かは、一切問題にならなかった。

単に小池さんと枝野が、やはり判官鼯鼠の典型である赤穂浪士の討ち入りの、「小池＝吉良入枝野＝浅野」と言う図式に、ジグソーパズルのラストピースようにぴったりと嵌ってしまっただけのことである。さすがにここまでの逆転は当人すら予測できなかっただろうし、「小池さんの落ち度」ではかわいそうだ。



## 瞑想録(その23)

しかもここで怖いのは、この手の理不尽が知り合い同士で作動しても怖いのに、国政や国運すら左右してしまう程の大きな波となりうるものが、今回の枝野事件ではっきりしたことだ。この機構が日本に普遍的な証拠に、「ハゲー」の豊田真由子も、落選したものの孤立無援で2万票も集めている。これはもう日本版の国民情緒法だ。

この摩訶不思議な心情が、小池さん事件は私にとっては他人事だが、もし会社とか親類間で我身に降りかかったら、一体どうしたら良いのだろう。今回の事件の教訓として、「わざといじめられている形に持ち込まれたら逃げようがない」という、いわば人民裁判やリンチに似た場面が想定できてしまう。

もちろん今回の枝野の炎上には、①小池さんの希望の党が烏合の衆化したことや、②今まで鳴りを潜めていたネット左翼や左寄りのマスコミが小池さんの小さいことをあげつらってここぞとばかりに逆襲したと言った、どさくさ紛れの野次馬的な複雑な要因もある。実際に真正共産党の増加分30人のうち、10人は希望から、もう10人は与党から、そして最後の10人は共産党から奪っている。ご本家の共産党も被害者なのだ(笑)。

世の中がすべて理性で決められる世界も味気ないが、こういう庶民レベルの低い情緒が絶対的な力を持つ世界もなかなか恐怖である。振り返れば1年前に小池さんが都知事になるときは、彼女がいじめられる義士の側だった。だから今度は枝野が吉良になる番である。

判官鼻頂、これが日本人に固着にしみついて無くならないのなら、いかにしてこの落とし穴にはまらないように注意して歩くか、この心構えが肝心だ。これが今回の事件の教訓であろう。

## 7、夢と解釈(その17)

<夢1> 業界でまとまって、パソコンの使い勝手のアンケートを実施することになった。顧問の先生と業界代表が集まって、アンケートを作った。するとその後に私が突然に、事務局を命ぜられた。そこでアンケートを実施するために、中途参加で内容も訳も分からないままに海外に向けて、皆と飛行機に乗り込んだ。

<解釈1> この程度のアンケートの為にわざわざ海外出張とはちょっと考えにくいですが、市場調査はまああることです。



## 瞑想録(その23)

＜夢2＞私は航空母艦の乗組員だった。水兵の服を着ている。そこに知り合いの集団がどこどこやってきたので、艦内を案内した。その後非番になったのでみんなで私の家に寄って、夜が明けるまでトランプをやったりお酒を飲んだりしてドンチャン騒ぎをした。

＜解釈2＞本来の自分は、こんなに世話好きだったり付き合いが好きだったりしていないのですが。

＜夢3＞向井美奈と言う名前の女性が、舞台の上で華やかな演舞を披露していた。しばらくしてそれが終わると、「隠密剣士と霧の遁兵衛」と名乗る別の役者が現れた。そして「今は演舞だけの時代ではない」と宣言して、背景に「忍者部隊月光」の映画を流しつつ、隠密剣士の名場面を演舞するのであった。

＜解釈3＞前日にたまたま、芝居小屋の前を通ったからですかね。看板によると小向美奈子のステージでした。

＜夢4＞善良な原住民のティンガがやってきて、「実は自分はマーホの子分だ」と告白した。マーホと言えば悪名高い、首狩り族の酋長ではないか。どうしてそうなったのだ、一体何をやっているのかと問い詰めると、「マーホの指示で荷抜きをやっている」と言う。私はびっくりした。するとティンガは続けて、「毎日やっているから、ほらこれもある」と、定期券まで見せてくれた。

＜解釈4＞最近「冒険ダン吉」とか南洋群島の現地人物を読んでいるので、その影響ですかね。

＜夢5＞珍しく会社ネタです。「最近はこの会社も中国人の社員が増えて礼儀がなくなっている、エレベーターに乗るときは先に上司に乗ってもらうものだろう」などと、私は同僚と話をしている。そこに自分たちのエレベーターが降りてきたので、一緒に昼食を取りに行った。「刺身定食」と注文するところでも中国人の食堂係が、ご飯とみそ汁だけよこして「150円です」などと言う。日本語が通じないので看板をたたいて「これをくれ」と言うと、「ああそうあるね、はい300円あるよ」などと適当だ。「中国人は米とスープだけで飯を食うのかね」などと、不思議になった。

＜解釈5＞最近の中華食堂はもちろん、和定食屋でも中国人やベトナム人が厨房をやって安く上げているので、これが印象に残ったのでしょうか。

＜夢6＞今日も終業時間のチャイムが鳴った。同僚たちに飲みに行こうと誘われたが、「妻の誕生日だから」といつもの言い訳で断って帰路を目指した。最寄りの駅はなぜか、居酒屋屋台街を抜けた先の階段の上にある。だが今日はなぜか階段がない。早くオサラバしないと、飲みに行く同僚たちに捕まってしまう。焦った私は小脇に抱えた



## 瞑想録(その23)

会社の書類をカバンごとドブに投げ捨てると、思いっきりジャンプして2階に這い上がった。

＜解釈6＞私はこれほどに、会社及び同僚との付き合いが死ぬほど嫌いです。

＜夢7＞地方の工場に出張することになったので、持ち物等をなぜかドラム缶に詰め空港に向かった。飛行機を降りてバゲージクレームで荷物を待ったが、ちっとも出てこない。係員に話すと「そのうち出てきますよ」と、他人事のようだ。結構待つと本当に出てきたので、ドラム缶ごとタクシーに乗って工場に着いた。早速工場の担当者と面会したが、自分の所属も要件も度忘れしてしまって、まるで出てこない。すると担当者の方から、「納品の打ち合わせでしょう、書類も作っておきましたから」と、気が利いている。その後一緒に食事に行ったが、「いやー、度忘れしちゃってねえ、アハハー」などと、私は空気も読めずに一人で笑っていた。

＜解釈7＞私は本当にこういう社員です。

＜夢8＞1日見放題の安映画館を出ると、帰路に着いた。ところが安映画館だけあって、超路地裏にある。あっちこち他人の家の裏庭みたいな所も通って、やっと出られたと思ったらそこは工業地帯だった。コンクリートミキサーとか倉庫群とかがあり、周りが壁に囲まれていてどうしても抜け出せない。その辺の工員に聞いてみたが、愛想もない。そうこうしているうちに事務主任と言う人に会ったので出方を聞くと、そのトンネルに入れと指示する。入ってみると壁の向こうから何か薬品が噴霧されて、私は溶解した。

＜解釈8＞こういう最後に抹殺される夢も、良く見るのですよね。やはり被害妄想かな。

＜夢9＞なぜか先日の「夢1」の続きを見た。アンケートを取り終わって飛行機で海外から舞い戻ると、皆でアンケートの集計を始めた。ところがやってみると、アンケートの設問がそもそもむちゃくちゃだ。例えばパソコンの「問題点なし」の機種でも、本当に問題がないのかあるいは使われていない機種なのか、区別がつかない。先生方は「次のようがある」などと言いつつ消えていき、仕方なくメーカー側の数人で報告書をでっち上げようとした。ところが設問1と設問2で問い合わせ機種がまるで違うなどアンケートがめっちゃくちゃすぎて、報告書のでっち上げようもない。頭が真っ白になってうなされて、本当に目が覚めた。

＜解釈9＞先生たちは威張るだけでピンチになると責任逃れに雲隠れする、これはどこの業界でもそうです。

## 8、会話に見る理解手順(SCP等を例に)



## 瞑想録(その23)

人による事物の理解を、会話を例に見ていきます。いずれは形式知から暗黙知に深める予定ですが、今日はとりあえず形式知レベルで2つの例を挙げます。

いずれの例もその分野に全く無知な私が、身近なより詳しい人にお伺いを立てて、何とか理解しようとしている場面です。またやり取りはすべて、考え込むことなく瞬時的です。

### <会話 1、展覧会場で>

Q「出展されている方たちの大半は、定年後や子育て終了後に時間ができた老人たちですか？」

A「いいえ、むしろ若い人たちが多いです。若い人を奨励していますし、定年後に始めてもここまで技術が向上しません。」

Q「でも若い人は仕事に忙殺されているでしょう」

A「それでも描きたいほどの根性で日々精進しないと、ここまでの絵は描けません。まあ中学校の美術教師をしていて、授業の合間も有効利用できるような人は幸せですね。」

Q「仕事をしながら寝る時間を削って描いているというイメージですか？」

A「何かとおカネもかかりますし、そう言う人が多いです。」

Q「最近年金受給年齢が引き上げられて「一億全員働け」時代とも言われていますが、こういう風潮は絵画の愛好者からも時間を取り上げて、けしからんとは思いませんか？」

A「本気で描きたい人は、そんなことには負けていないですね。」

Q「60歳を過ぎてガードマンをしながら絵を描くなんて、割を食っている感じでしょう？」

A「ガードマンをしながらでも絵は描けます。」

Q「それでもそういう人たちも、できれば一日中絵を描いていたいですよね？」

A「ものすごく集中する仕事なので、毎日朝から晩まで絵を描いていたら、逆に体も心もボロボロになってしまいますよ。」

### <会話2、SCPについて>

(注: SCPの用語等はSCP財団に帰属しますが、内容の不正確の行き先は私です)

Q「SCPって奇想天外な作り話だと聞いたけれど、なら科学以外全部、例えば小説は全部SCPになっちゃうの？」

A「SCPは粘着性がないとだめです。小説を読んでもその時没入してお終いならSCPとは言いません。その世界から抜け出せないほどならSCPです。」

Q「例えば「プーチンとトランプは同一人物だ」という話はSCPになるの？」



## 瞑想録(その23)

A「それにもっともらしい疑似科学とでもいうべき度屁理屈の説明がついていて、多くの人がしばらくそれを信じてしまう程なら、その説明はSCPです。」

Q「PIXIVでSCPをキーワード検索したら、あまり変な絵はヒットしなかったけど？」

A「基本的には説明なので絵より言葉、ツイッターとかですね。」

Q「SCPの分かりやすい典型例を挙げてよ。」

A「ある少年が「コップを持つとコップと手の分子同士が結合して取れなくなる」と言われて、怖くてコップを持てなくなってしまったと言う例があるけれど、これなんかSCPの分かりやすい例ですね。」

Q「都市伝説もSCPなの？」

A「近いところがありますね。全部とは言いませんがそのナレーションにひらめきがあってうならせる程ならSCPです。」

Q「SFとか近代絵画とかアニメも、現実離れしているけどSCPなの？」

A「例えばドラえもんは基本的にケテルタイプの凶悪なSCPに近いです。」

Q「ええ！あんな子供のヒーローが凶悪タイプのSCPなの？」

A「一瞬で世界を消滅する道具を持っているでしょう、この上なく危険です。」

Q「SCPを引っ張っているのって、「2ちゃんねる」のひろゆきさんみたいな人かな？」

A「まあマニアックに知られた人は幾人か居ますが、共通して言えることは頭が良い、ひらめきがすごい、空想力が抜群だということです。」

Q「人として究極と言うか、ある意味科学を超えていますね。」

まあ無限とある日常会話のどれでも例になるのですが、今回はたまたま私が先日を経験して印象に残っている会話を2例挙げました。人間の会話が人工知能のそれに比べて特徴的なのは、①いつの間にか違う話になっていないことと、②ファジー論理に良く見られるような意味の拡散と暗騒音化がないこと、です。

ファジー論理の場合は演算を重ねるごとに意味幅がどんどん広がって、すぐに暗騒音化してしまうのが欠点でした。しかし人間同士の会話と言う蓋然論理の積み重ねは、ダッチロールしていません。ちなみにファジー論理は、不完全な蓋然論理に相当します。

蓋然論理が広がらずダッチロールもしない理由としては、①マクロのモチーフを理解していて大きな方向性が認識されている、②蓋然性により次の選択肢が限定される、③論理の連結が単なる足し算でなくて意志的な結合になっている、の3つが考えられます。

蓋然論理の典型的推移なのですが、①蓋然論理は確率論でなく知恵による選択です



## 瞑想録(その23)

し、②従来の集合論のように全部拾おうとせずに主要部のみ抑えようとする(端部は切り捨てる)、の2つの要因が他の論理推移と根本的に異なっていると思います。

### 9、地味ハロウィン

米国発祥のハロウィン(万聖節)は日本ではコスプレ仮装大会と形を変えて定着しましたが、その中で最近「地味ハロウィン」と言う分野が発展しています。これはガンダムやワンピースと言ったアニメのコスプレをするのではなくて、「これはありそう」と思わせる街中の一瞬を切り取って、思いっきりテンプレ的に仮装したものです。

身近な似た例を挙げれば、au の宣伝の「三太郎」みたいな感じでしょうか。そしてこの「ありふれた一瞬の切り取り方」が天才的な気づきで、その天才性はSCPに匹敵するほどです。明らかに科学を超えていて、人類の妄想の極みと言えます。以下にその題名のみを羅列します。画像を見たい人はツイッターで、「#地味ハロウィン」ハッシュタグで検索してみてください。

「SNS で知り合った男に初めて会いに来た女」

「全部忘れた子供を追いかけるお母さん」

「ホテルで朝食を取りに行く人」

「ゾンビ映画の序盤・中盤で死ぬ人」

「爆買い中国人」

「はじめてのおつかいスタッフ」

「自宅女子」

「指示を受けていないアルバイトスタッフ」

「廃止が決まって落ち込む 아이폰 のホームボタン」

「PTA 会報誌「あおぞらだより」に掲載された地域のおばさん」

「冬の中国人観光客と渋谷駅にいる上京したての女」

「家に帰れないプログラマー」

「次の授業の教室に移動する女子高生」

「めっちゃ試飲を勧めてくる店員さん」

「電車で降りる乗客にイヤホン引っかけた人」

「はじめてのおつかいカメラマン」

「8本撮りを控えたいろはに千鳥の撮影前にロケバスで一服する大悟」



## 瞑想録(その23)

- 「社員コスプレとアンドロイドコスプレでございます」  
「トイレに並んでいるのに一向に列が進まなくて困るブルヲタ」  
「フラブラしたら周りから叱られてショボくれているオジサン」
- 「現代音楽が苦手で苦悶の表情で寝る人」  
「スーパー銭湯にいる女子グループ」  
「見える人にしか見えない人」  
「日立台帰り道にある朝日新聞販売店の号外渡す人」  
「楽天市場でそこまで安くないのに激安と謳って笑顔で収穫したサクランボを見せる生産者の写真」
- 「高校生役がきつくなってきた20代俳優」  
「友達の有料素材の女」  
「職場で『パンまつりのシール集めている』と言ったら思いの外集まりすぎて困っている人」  
「春節で三越に買い物に来ている中国人」  
「盛大にコーヒーをこぼした人」
- 「戦隊モノの変身前！」  
「フジロックのスタッフ」  
「入り口で入場パスを確認する&・ホワイトステージで入場規制している人&入り口でゴミ袋を配る人」  
「のど自慢大会で絢香を歌う女」  
「銃で頭を狙われている人」
- 「昭和の喫茶店の若い見習い」  
「JINS 店員」  
「大学7年生の先輩」  
「イグノーベル賞受賞者」  
「同人作家」
- 「一般参加のコスプレイヤー」  
「運動会のお母さん」  
「ピエトロドレッシングがずるい」  
「フォトショで修正中のカップル」  
「めっちゃくちゃ試飲をオススメしてくるオーガニックハーブティ専門店の店員」



## 瞑想録(その23)

「懸賞企画でチャンネル登録を募る YouTuber」

「練習を抜けて来た女子プロレスラー」

「美容部員の休憩」

「今日退職した人」

「マンションの同じ階の住民」

「中国人コラボが発生しています」

「ノーベル文学賞発表を待つハルキスト」

「何かしらで優勝した人のコスプレ」

「リュック全開で気づいてない人」

「DIO に時止めドンされたおっさん」

「娘の荷物を持たされているお父さん」

「SNS タグ付け女子大生」

「ファンじゃないことを言えないままライブに来てしまった友達」

「おばあちゃんの介護でやってきた、微妙に若くないけどテキパキ動くヘルパーさん」

「存在感の消し方が天才と褒められまくっていたドアを守るバイト」

「ジェットタオルの弱いトイレから戻ってきた人」

「アメリカのスシバーのアジア系店員」

「第二外国語の非常勤講師」

「近所の TSUTAYA にビデオを返しに行く人」

「実験に失敗した科学者の仮装」

「大喜利のお題」

「服装がかぶって一瞬盛り上がった web ディレクター」

「私はこれから来客対応」

## 10、笑える間違い

このブログでは「アナログ」をキーに脳の構造や作動原理、さらにはその特徴的発現である「笑い」にも注目しています。今回は特に、うっかりミスを起源とする笑いを見えます。



## 瞑想録(その23)

以下に羅列する例は TAL さんのブログより、瞑想の為に引用させて頂きました。本来 TAL さんが集めたもので、感謝です。なお TAL さんのサイトには写真入りで、実例が連載紹介されています。「痛恨のミス」のキーワードで、記事をタイトル検索してみてください。

「埼玉産輸入ブロッコリー」(埼玉は外国か)  
「食べる2時間前に食べると美味しい」(いつ食べたら良いの)  
「夜店の焼きそば・ショートケーキ味」(そんな味は勘弁)  
「ミシンとカニの抱き合わせ販売」(考えられない組み合わせ)  
「この焼き鳥弁当は豚肉を使用しています」(焼きトンと言えば済む話)  
(衣料品店で)「マネキンが天井から、首無し首つりになっている」

「名古屋飯・台湾ラーメン・アメリカン」(要するにどこなの)  
「ハーゲンダッツキャラメルクッキー」が、マーボー豆腐に見える  
「ジャガイモ」(袋の中はキュウリ)  
「クワガタチョコレート」(形がリアルすぎ)  
「くまモンのベーコン」(一見クマの肉)  
「ペヤング焼きそばペペロンチーノ」(もうスパゲッティでしょう)

「ライオン手間ましブライト」(正しいブランド名は「手間なし」)  
「いかよん」(「いよかん」に)  
「天然のだし香るお母さん\_\_の\_\_ジャンボ稲荷」(天然のお母さん?)  
「KYアベツ」(キャベツに)  
「マルチホル\_\_ダー」(「ダー」が気合入りすぎ)  
「ドアストッ\_\_パー」(パーの一種か?)

「てんぷらや炒め物に福島産桃」(モモを炒める?)  
「かえるちゃんパン」(形がリアルすぎる)  
「大特価\_\_100個頼むつもりが間違えて1000個頼んでしまいました」  
「大特価\_\_やっちゃった発注品」  
「見切り品\_\_こんな私で良かったら」  
「本日の味噌汁はコーンスープです」(もはや味噌汁でない)

「360度全方位から見えない液晶保護フィルム」(まるで見えない)  
「超特価品\_\_すな」(「なす」のつもり)  
「ソフトマヒン」(マフィンのつもりらしい)



## 瞑想録(その23)

「狂いブタカレー」(「黒いブタ」のつもりだろう)  
「ピーターパン」(商品は「ハッピーターン」)  
「ディズニーのシムシムソロ」(本当は「ツムツム」だそうです)

「アイス3割引き! \_\_おいしいアイスは除きます」  
「日本は終了しました」(「本日は」のつमりのようだ)  
「はるやま開店」その下に「閉店」  
「頑張れ受験生!」(キャットフードコーナーに)  
「日替わり弁当163円」(永谷園の茶漬けの素に)  
「枝豆」(「枝豆」のつもり)

「テーブルワロス」(テーブルクロスのように)  
「止れま」(「止まれ」と言う標識のつもり)  
「ハイガつきにくい\_\_衛生ごす」(中国製品)  
「シンエンボスで飯ヤンもじ\_\_っシ素抗菌」(中国製のしゃもじ)  
「みそ卵うどん」(どういう食べ物だ)  
「ボージョボーレーヌ」(ワインに)

「セール\_\_0円引き」  
「トマトケヤップ」  
「かぼちあ」  
「ガリガリ君\_\_超まずいので半額」  
「CAT1000円!」(床屋です)  
「not///made in China」(嘘でしょう)

「幼児袋詰め」(食品コーナー)  
「人肉の芽」(ニンニクらしいです)  
「アンパンマン」(ドラえもんパンに)  
「品名\_\_店長」(肉パックに)  
「じゃがいも」(人参袋詰めに)  
「ババナ」

「デス\_\_カウント」  
「バナナ」(スイカに)  
「ママキラー」(殺虫剤)  
「受験生応援! \_\_ほろ酔い」



## 瞑想録(その23)

「ドレエモンプリン」

「スリッパ、お値打ち\_\_298,480,580 円」(30億円のお値打ちスリッパ)

「トマト」(イチゴに。赤いのは合っている)

「ソーセージ\_\_常温でKOです」

「セール\_\_69円の品を88円！」

「中2病棟」

「大学芋\_\_失敗品」(本当に黒焦げの「商品」)

「198円が20%引きで1598円」

「鮮魚」(商品はたい焼き)

「ブッコロリ」(ブロッコリー)

ほとんどがパートのおばさん店員の、忙しい余りの書き間違いや貼り間違いのようです。これらの例が笑えるのは、①間違いなりに意味が通っている、②でも少しおかしいのでよく見ると間違いとその原因が見えてくる、③正しい意味に置き換えるとすっきりする、④正しい本来の意味を鏡に間違いの方を再度見るとかなり変だ、と言うプロセスでしょう。

一般に笑いは、①自分の方に優越感を感じかつ、②相手の性格が間抜けに見える、時に発生します。今回の間違いもこれらを実行したおばさんたちの何気ない達成感が見える分だけ、また読者の側がネタ明かしに成功している分だけ、余計に笑えるのでしょう。

### 11、暗黙知的理解の構造

理解と言う行為は、発せられた文句を構成する個々の単語を、分解したままでなく包括的な1個の意味として、脳内の全く新規な1点を占めることにより起こる。そしてその1点の位置は、元になった個々の単語の形式知に全く近くない、密教的陰解的な暗黙知としての位置である。

「テーブルの上のお皿を取ってよ」といった簡単で日常的な何気ないお願いを、例として挙げよう。頼まれた方は先ず頭の中で「テーブル、皿、取る」と、構成する個々の要素を認識し続いてこれらのつながりとしてのネットワークに至るのだろう。だがここで留まっていたらまだ理解ではない。



## 瞑想録(その23)

これらが溶解し総合されて、アナログ的でマクロな「全体モチーフ」を、元の構成要素とは別の脳内の新たな1点として確定して、初めて理解したと言える。もしネットワークの段階で留まっていたなら、それらの関係や構造が理解できていないことになる。決してお願いに対する応答措置に至らないであろう。

つまりまず頼んだ方は、頼みたいことを脳内の一点の暗黙知として覚知した上で、それをできるだけ正確に相手に伝えられる一連の形式知を近似として探して、その形式知化した言葉で相手に依頼する。そして依頼された方も伝言された形式知を基に、できる限り相手の暗黙知と同等の位置に暗黙知を設定しようとして、「再構成操作」をするのである。

その再構成の結果は多くの場合、「1点」とは言いながらアナログであり一定の広がりを持つその誤差の範囲内で一致して、その結果依頼された者は依頼した人の希望道理の行動を返すに至る。リクエストのヒントが少なくて1点に絞れないときは、「赤いお皿ですか？」などと更問をして、近づける努力をする。

今は極めて短い例で示したが、仮にそれがどんなに複雑であってもあるいは長くても、基本的な手順は同じである。長編小説の理解も究極にはこの「暗黙知による1点理解」であり、強いて言えば「章ごとの部分理解」と言う中間プロセスをも含む程度の違いしかない。

但し会話は蓋然理解のやり取りであって、科学と決定的に異なって再現性のないのが本質であるから、同じ暗黙知から形式知への差し戻しでも人により場合によって全く異なることは往々に見られることである。今の例でも同じ依頼に「灰皿が欲しいの」と形式知化することもあるだろう。

ここで別の例を挙げる。「今日は花金だよね」と聞かれて「違うよ」と答えるのは、良くも悪くも捻りがない愚直な答えである。この例でもしばしば、「うるさい、今忙しいのだよ」などと答えることも多い。この答え方は論理でもなければ集合や元でもなく、そもそも相手の土俵に乗ってすらない。

この「論理でも数学でもない」と言う断りは当然である。そもそもの「1点収縮とその1点から拡散」という近似行為自体が論理も集合も前提も要請していないのだから当然である。加えて再現性がないと言うことは非科学だと言うことだ。



## 瞑想録(その23)

人のプリミティブな覚知とはこのような「野蛮な」ものであり、一言で言うとアナログなひらめきや知恵や勘である。だから論理とか集合論とか、きれいでないと扱わない学問と言う人工的な手続きが、およそ手に負えないのはむしろ当然である。そしてこの猥雑さこれこそが人としての自然なありようなのだ。

科学者は科学を言わば内側からしか見ないので、科学の領域を広げることはいできない。そして逆に現実のほとんどは、科学の外の再現性のないところにある。暗黙知に対する現状の科学的アプローチも、「暗黙知を形式知に還元する」程度の役に立たない白けた範囲をやっている。その範を超えたらもはや科学でないのだ。

さて最初の「テーブルの上のお皿を取ってよ」に戻ってみよう。これに対応する究極の暗黙知の位置は、これらを構成する「テーブル」、「皿」、「取る」の近くにあるのだろうか。近いという見方もあるだろうが、そもそもの「テーブル」、「皿」、「取る」のこれらは互いに近くもなんともないのであるから、少なくとも距離空間のような「近いものに近いものはかなり近い」と言うことは全くない。

つまり脳の空間とは、仮に空間であったとしても距離空間ではありえない。それ以前に空間と言うよりも、ネットワークと見た方が近いと言うことだ。つまり一般的に言えば、空間(平面等)はそもそもデジタルに立脚した連続体であって、アナログとは相いれない。「アナログ空間」と言うものはないと言う結論になる。ただ感じとして、全くのトポロジックなネットワークとも言い切れないようにも感じる。

脳内の遠近で言えば、「机の上の赤い皿」と「机の上の白い皿」は互いに似ている。つまり脳内の距離感とか遠近はある程度あって、その結果これらの内の一方を経験していれば、他方も応用出来て形式知化や暗黙知の位置づけが容易になるのだ。距離が全くないのではない。

そしてこの距離感もしくは類似関係と言うある種のネットワークが広い人ほど、一般的に気付きやひらめきが良いつまり地アタマが良いということになる。要するに「1を聞いて10を知る」人と「10を聞いて1を知る」人の違いである。また形式知をヒントにいかにかに的確な暗黙知を得るか、これも地アタマに重要だろう。

こちらのネットワークの構造をもっと知れたなら、あるいは脳構造の解明のヒントになり、さらにアナログ演算の一つの形が見出せるかもしれない。



## 12、昭和8年の少年倶楽部

先日に隣の市の市民ミュージアムに行ったら、イベントの一環として戦前の月刊誌「少年倶楽部」の昭和8年版12冊が、手に取って読めるようになっていた。

今年が昭和92年相当だから、今から84年も前の少年誌そのものを読む機会を得たわけだ。毎号300ページくらいあって厚さも3cmくらい、もちろん全部を読みつくしたわけではないが、パラパラめくってみた。「冒険ダン吉」が始まった年であり、「のらくろ」は佳境に入っていた。

私自身は戦後の生まれだから、これらの本は私の親の世代かもっと上の世代が夢中になった、伝説の月刊誌である。漫画と小説と宣伝を時流に合わせてうまく組み合わせる編集方針は、私の時代にあった「中三時代」等とあまり変わっておらず、「基本は戦前にできていた」かの印象を受けた。

時代柄小説にも愛国物や軍隊物が多い点はあるが、「中三時代」はそれが学園物と青春物に入れ替わったと言う形である。もっとも現代はアニメとゲームとネットの時代だから、雑誌と言っても趣味の広がりに応じて専門化していて、こういう総合雑誌はもはやメジャーではない。

それにしても昭和8年と言う時代、時系列的にポイントを並べると、昭和7年に文民首相の犬養毅が暗殺された五一五事件、昭和10年に陸軍統制派の中枢にあった永田鉄山軍務局長の暗殺事件、昭和11年に青年将校の反乱で主要閣僚が襲撃された二二六事件、昭和12年に日中戦争開戦、昭和16年に日米開戦と、次第に戦時体制に入っていく、その初期に当たっている。

ところが少年誌と言ってもその内容はすでに軍国調で、かつての日清日露大戦の將軍や英雄たちの紹介や、「その後に続け」といった趣旨の小説や漫画が並んでいて、時代はもはや戦争突入寸前であるかの印象を受けた。一般大衆の気持ちだが、もはやそちらの方を向いていたのであろう。

これでは確かに大東亜戦争は、小手先では不可避だったとの印象を受けた。しかも3国同盟以前なのに、すでにドイツを褒めて英米をけなしている。内容的には武士道色が強く、これを読んで育った世代がちょうど戦争時に、前線に志願していった形となっている。



## 瞑想録(その23)

あらかじめ断っておきたいが、私はミリ物の全くの素人である。最近に元陸上自衛隊の将官であった黒野耐氏の「参謀本部と陸軍大学校」と言う新書本を読んでタメになったほどだから、その方面の知識の浅さは明らかである。ただこの本に基づいて、自分なりに戦前を総括してみる。

明治維新直後に、「世界を支配するのは国力、もっと言えば武力の優劣による弱肉強食社会で、負ければ植民地まっしぐら」と言う冷徹な事実気付いた明治政府は、国力や兵力増強に必死になった。多少の試行錯誤のちに兵制はドイツに見習うこととして、ドイツからメッケル大佐を招聘して顧問格にした。

このメッケルが良くも悪くもゴリゴリに現場主義の軍人であったために、初期の軍隊教育は現場中心兵術中心の内容になり、これがそのまま将官養成のための陸軍大学校の校風にもなった。現場主義はこと戦争においては理論主義よりもはるかに現実的であろうが、戦術に偏るあまり政治や外交や戦略については疎い狭量な戦争専門家が要請されがちな弊害があった。

中央政府やその一部としての軍隊組織についても、試行錯誤の段階でその中心にいた人物たちの思惑で左右して、例えば陸軍大臣と参謀本部と大本営と元老の分担や関係があいまいなままに固まってしまったきらいはあったものの、日清日露の大戦までは良くも悪くも薩長閥の限られた人物が政治も軍事もともに扱うことで、組織の欠陥は補われていた。

ところが彼らが寿命を終えた第一次世界大戦ころから、戦術しか知らない陸大出身者が軍の中央を占めることとなり、また一度固まった組織は容易には変えがたく、さらに軍事技術の発達(機関銃、戦車、飛行機等)にもかかわらずそれに対応した組織に柔軟に変えることもできずに、ひずみが出始める。加えてこのころから戦争が持久戦になる傾向にも、対応できなかった。

その分かれ目が第一次世界大戦とロシア革命に対応したシベリア出兵であるが、ドイツから租借地は奪ったもののシベリアの方はちぐはぐなお茶にごしの派兵で、たいして失わなかったが得るところもなく撤兵している。

そもそも戦争とは始めるよりもいかにして終わるかの方がよほど難しいのだが、この終局観のなさ、特に政治や外交も考慮した広い視点からの組織的な対応のなさが日本においても目立ち始める。陸軍と海軍の対立も激化して、次第に落としどころのないものとなっていく。



## 瞑想録(その23)

世界規模では何回かの軍縮会議によって日本の軍備拡張は制限を受けたが、日本はこれを「黄色人種いじめ」と受け取った。そして政治や外交の素養のない陸大出身の軍部は、自分たちの都合だけで自己増殖していく。この頃から軍縮に順応しつつ勢力拡大を図る統制派と、天皇の名を借りて皇国日本を誇示する皇道派の対立が激しくなる。

結局冒頭に「少年倶楽部」でも見たように、また朝日新聞等の主要マスコミがそうであったように、更には日清日露後の政治的な講和を屈辱とする庶民の根深い機運もあって、盲目的な軍拡が国民の世論の主要を占めるようになり、上層部もこの流れに押し流されてしまった形である。

その結果日本は、首相の東條英機は統制派であったものの、また研究機関等は特に持久戦になった場合の日本必敗を予測していたにもかかわらず、最悪の「シナリオなき戦争」あるいは「納め所を見出せない戦争」に無謀にも突入して行って、その結果が無条件降伏と言う最悪のしかし必然的な結果であったと言う流れである。

そもそも庶民はいつの時代でも無知に無謀になりがちなものだから、上に立つ者が抑えるくらいで良かった。加えてやはり明治維新からの流れであるが、軍部が武士道に逸るあまりに情報と兵站を軽視し過ぎて、戦争をシステム論的に考察する人材に欠けていた点大きい。

なお今回参照した本からは離れるが、もう2点ほど別途気付いた点を挙げる。

①ミッドウェー海戦までは海軍力は日本優勢であったが、ミッドウェーの重なる失敗で逆転する。ただこれを不運あるいは「天祐がなかった」とするのは間違いで、それに先立つ真珠湾の出来過ぎと相合わせて評価すべきである。

②北方、中国、南方のいずれも兵站線が異常に伸びすぎていたが、これに気付けないうほどあるいは気付いても処置できないほどに、日本の中枢部は国際企画力を喪失していた。

③外国の例であるが朝鮮戦争時、マッカーサー司令官は中国本土爆撃を企図した。それは戦術的には正しかったのだが、より国際政治を大局に見ていたトルーマン大統領によって拒否され、マッカーサーは解任された。これが国家の戦争の本当のやり方である。



庶民感情と国際情勢、このコントロールとバランスの重要さは、思うに今も変わらない。

### 13、意味数学？

学問として行われている論理学は、いわゆる完全論理だ。つまり演繹論理、三段論法、背理法のように、意味に関係なく形式関係のみで絶対真になってしまう形式論理のみだ。

ところが今までも何度か指摘したように、世の中の論理のほとんどは「意味論理」だ。例えば「忘れたと言うことは、一度は覚えたと言うことですね」とか、あるいは「今日会社を休んだと言うことは、いつもは会社に行っていると言うことですね」とかだ。これらは形式上では真偽は問えないが、意味において絶対真な例である。

世の中の論理のほとんどが形式論理でないのは、形式のみで成立すると言うことは言い換えれば、「その論理は追加の情報価値や存在価値がない」と言うことだ。たとえリスクを冒してでも情報価値のあるやり取りをしないと、学問そのものの特徴でもあるが世の中は「熱的死」であって、何の進歩もない。

意味的絶対論理の先には更に、蓋然論理もある。例えば「失敗を恐れる者は大した人材になれない」とか「現場を見ない空理空論は道を誤る」とかだ。最近には「台風の日にはコロッケが売れる」と言うのもあった。これらは経験と知恵に裏打ちされていなるほどと思うが、しかし絶対に真と断定はできない。その意味で味わい深い代わりに、適用にはリスクを伴う。

さて、このように単に言い換えに過ぎなかった論理学も、そこに言葉の意味と言う実態を有機的にかませれば価値を有して生きてくる。但し同じく意味をかませた時点で、学問からは外れる。言葉の意味は個別具体的で、一定の定理が存在しないために、学問として統一的に論じるのになじまないからだ。

ただ学問から外れても良いのなら論理と同様に数字も意味をかませれば、意味依存で自明でない数学が作れて豊かになるのではないか。こうも考えてみたのだが、どうもそれは難しいのだ。数字と言うものが個別の意味を極限まで切り捨てた残りなので、論理と違って意味をはめ込む隙がない。



## 瞑想録(その23)

つまり数字と言うものは意味を完全に捨てた代償として、いわば「バーター的に四則演算を得た」と言う種類の道具なのだ。このバーターが得であったか損であったかは、微妙なところである。いずれにしても現状では、数字と意味は背反である。特に「論理と演算は全く別物」、これは心に留め置くべきだ。

ただし数学と言っても集合論なら意味は入る。ふつうに「弾性体はゴムとばねとスポンジから成る」などと言っているではないか。その意味で集合論は、純粹数字と論理の中間にあるようなものである。ただし現状の数学集合論は形式論理と同じく、意味を形式的に含むだけである。

例えば「新宿中心部は新宿6丁目を含むのか？」と聞かれると、これは微妙なところだ。「新宿高層ビル街は新宿中心部とどういう関係にあるのか」と問われてもこれも答えは微妙で、ある意味人によって答えが異なってくるものだろう。

素朴な意味での集合論は意味を含むのだが、数学の集合論は極端に「集合と元の盾関係」であり、「元であるかないかのどちらかしかない」と言う形に切り詰めてしまっているの、結局「意味が介在しない代わりに学問である」と言う、形式数学になっている。

加えて数学集合論の極端な点は、世の中の事物の相互関係は多種多様なのに、集合論ではそのうちの「含む・含まれる」以外はすべて除外してしまっている点だ。「生ものはいずれ腐る」と言う場合の転化関係や、「ねじ回しで締めると閉まる」等の結果関係、さらには「男と女は補い合う」と言った相補関係等々世の中の関係は多種多様だが、集合論では「含む」以外はすべて無意味として切り捨てられている。

ここに学問の限界が見える。意味そのものを規則性がないと言う理由で除外しているのだ。だから数字は四則演算等のおかげで何段もの論理が組めるかもしれないが、感情や状況の複雑な絡み合いやその妙味は全く表現できない。

もっとも言葉と言う形式知も、例えば「机」と言っても世の中に無限個あるものを一言でまとめていることからわかるように、数字ほどではないもののかなりの抽象性を固有に有している。「四則演算が乗るほどまでには抽象的でない代わりに、感情や状況の複雑性を表現できる」という段階の抽象性なのだ。

だから「机」と言ってもそのイメージは一定の範囲内で個人ごとに異なるのであり、小説の感動部分についてもその部分への感情移入の仕方は個人ごとに異なるの。だが



## 瞑想録(その23)

たまたま世の中がその程度の揺らぎがあっても、大抵のことが足りるようにできているだけのことなのだ。言い換えれば「たいいていのことは足りる程度に言葉が分化されている」だけのことなのだ。

例えば南洋の人々には「我慢する」に当たる言葉がなくて、せいぜい「お腹がすいた」という言葉で置き換えて運用せざるを得ないと言う。その代りヤシについては、その成長具合等によって数十の表現法があると言う。言葉とは多分にこのようなもので、必要に応じて効率的に細分化されているだけなのだ。

最後にこのような人工物ばかり学んでいる理系人間に特有の、「理系病」の病理形態を概説する。①人間力がまるでなくて精神的にはほとんど幼稚園児のくせに、②時々思い出したようにまたさも世の中を知り尽くしたように事件の裏を解き明かして見せ、③「世の中なんてこんなものさ」と一人でブラックに得意がったりする。

④何が面白くて世の中を生きているのか理解不能だし、⑤世の中全てが物理だと思っているから思いやりとか配慮のかけらもなく空気も読めない。⑥要するに同情の余地のない性悪ながきデカ。⑦世の中を自ら学ぶと言う生物根本の本能が全く欠如して単なる電卓になっている。一種のカタワ。

研究所とかに行くとこの手の人種が何人か居るが、彼らの共通した特徴は、研究者としてもテストがなくて二流以下だと言うことだ。

### 14、「笑える間違い」の構造分析

先日TALさんが集められた「笑える間違い」を列挙しました。本日はそのいくつかについてなぜ笑えるか、笑える構造を分析してみたいと思います。

「いかよん」:「イヨカン＝伊予(愛媛県)のミカン」という認識のない人には、イヨカンよりもイカヨンの方が「ケロヨン」みたいで言いやすいです。おそらく「イカヨン」と書いたおばさんは忙しさのあまり間違えて書いたのではなくて、「イカヨンが正しい」と信じて疑っていないのでしょう。私も昔にジグソーパズルメーカー大手の「ヤノマン」を「ヤマノン」と言い間違えて、店員に笑われたことがあります。

「ババナ」:さすがにこれは書いたおばさんも、「正しくはバナナだ」と知っていたことでしょう。ただこのおばさんは、「同じ字が続く」ことに強い印象を持っていたのです。そこ



## 瞑想録(その23)

でうっかり「ババナ」と書いてしまいました。「ババが書いたババナ」みたいで余計に笑えます。

「食べる2時間前に食べると美味しい」:これは「食べる2時間前に冷やすと美味しい」が、本来訴えたかったことですかね。同じ言葉を複数書き続けると、パラドックスができてやすくなります。自己言及の形ができてしまうのですね。

「ライオン手間ましブライト」:続けて同じ字を並べる間違いはよくあるパターンです。この例の場合はその法則が適用された結果、意味がほとんど真逆になった上で理解可能になっているのが笑いの源泉です。

「見切り品\_\_こんな私で良かったら」:これは間違えようが無いので、意図的な受け狙いでしょう。「客の目を引いてよく売れるのではないか」と言う推測に基づいた、一種の愛社精神です。

「アイス3割引! \_\_おいしいアイスは除きます」:これは忙しさの余り本音が出たのかな。暗黙知としての脳内位置は合っているのですが、形式知に近似変換する際に配慮が足りませんでした。

「日本は終了しました」:典型的なキー操作ミスですが、意味がとんでもないことになっています。ここは某隣国の政治首脳部なのでしょうか。勝手にゲームオーバーしないでください。

「ボージョボーレーヌ」:「ボージョレーヌーボー」のつもりなのでしょうが、長い上に日本語とかけ離れていて、これを書いたおばさんはウル覚えでこの様に覚えていたのでしょう。もう一度書かせると今度は「ボボーレーヌージョ」などと書くかもしれません。

「not///made in China」:わざわざ断るところが返って怪しいですね。人が得る情報はしばしば、文字よりも雰囲気や態度と言った背景的かつ総合的な源であることが多いのです。典型的な「本質は本流でないところにある」です。

「幼児袋詰め」「人肉の芽」:それぞれ「楊枝袋詰め」と「ニンニクの芽」でしょうが、一字違いが大違いで、とんでもないあり得ない意味になっています。ここまで行くと怪奇ブラックです。



## 瞑想録(その23)

「アンパンマン」(ドラえもんパンに): アンパンマンとドラえもん、どちらも子供のヒーローで確かに似ているところはあります。しかも「パンのヒーロー」はアンパンマンの方で「ドラえもん」はドラ焼きですから、間違えるほうが当たり前ですよ。

「品名\_\_店長」(肉パックに): これは嫌な上司への当てつけではなくて、これを打った店員がこのタイミングの時に何らかの理由で頭が店長の存在でいっぱいだったのでしょう。これも人が良くやる種類のうっかりミスです。

「ママキラー」(殺虫剤): 正しくは「フマキラー」ですが、手書きだったので「フ」がほとんど「マ」に見えてしまいました。でもこれって恐妻家の旦那がニヤッとしそうで、ブラックと言うよりも涙を誘いますね。

「受験生応援!」(ウイスキーに): 受験生を酔っぱらわせては困ります。勉強に集中すべき時ですし、たいていは未成年でしょう。これは多分、「受験生応援」と言う板を本来の隣のラックに張ってしまったうっかりミスなのでしょう。でも意味が変に成立して、笑えてしまいました。

「鮮魚」(商品はたい焼き): 気持ちは分かります。「出来立てのほやほやのタイ焼きだ」と言うことでしょう。でも「鮮魚」には別途定義された本来の意味があって、この場にはそぐいません。半可通と言ったところですか。

「ソーセージ\_\_常温でKOです」: 「OKです」のつもりだったのでしょう。KOはノックアウトですよ。これも打ち間違いなのか店員のおばさんの頭の中ではこうなっているのか、どっちの可能性もあり得ます。

個別の分析は以上です。いずれにしても今回の例も、この先に論じる「物語化の法則」の生きた事例になっています。人は既存の経験に基づいて頭の中に幾通りかの起承転結を伴う一貫した物語を多数持っていて、それらが事理解のテンプレートになっているわけです。

それらの脳内の物語のほとんどは、好感があつてかつ納得できるものです。そしてそれらの物語に適度の代入と変換をすることで、人は世の中の諸事象を理解し判断し処理しています。しかしそれらの物語は必ずしも万能ではないので、時として表現の間違いが生じます。

他方で読み手の方も自分の中の物語に照らして、「これはかなりわかるがちょっと不



## 瞑想録(その23)

自然だ」と判断します。そして「自分なら一体どうやればこういう結果になるだろう」と想像の結果その間違いチャンネルを発見します。そして発見の喜びと間違い手への同情が、同時に沸き起こると言う順序でしょう。

### 15、意味理解の境目(その3)

先日、「武田鉄矢が村上春樹の『どこが面白いのか分からない』と言った」と言うニュースを聞いた。もちろん両名とも有名人なので私は彼らについて、普通の人を知る程度の知識はある。

そして私はこの発言の意味を、自分なりに一瞬で理解した。つまり「武田鉄矢、村上春樹、面白い」の「3つがバラバラ」でなくてトータルとしての絡み合いについて、あたかも臆絵でつまり論理と具体画のハイブリッドみたいな形で、マクロなモチーフを脳内に確定できた。

断っておくとこのニュース以前に私は、武田鉄矢と村上春樹を組み合わせで考えたことは一度もなかった。つまり「準備運動なし」のいきなりだったのだ。それにもかかわらず内容を一瞬で理解できて、「やっぱり武田鉄矢は正直なバカだな」と感想まで持てたのである。

ところが別の日に別のある人が、「広瀬スズって学生気分が抜けていないわね」と言うのを聞いた(以下ではMSワードのエラー回避のために広瀬スズさんの名前をカタカナ表記する)。そしてこちらは全く理解不能だった。言った人の文法が間違っているわけではない。

「広瀬スズ、学生気分、抜ける」のそれぞれは良く理解できるという意味では、冒頭の武田鉄矢の例と条件が違わない。それにもかかわらずあたかもレンズの焦点がぶれていて点が結べないかの如くに茫洋として、この人が何を言いたいのかおよそ意味がつかめなかった。

例えば「広瀬スズより広瀬アリスの方が可愛いね」なら、私はアリスさんの方は全く知らないのだが、「人によってはこういう感想も持たさうな」程度には理解できる。あるいは「新入社員の早川君って学生気分が抜けないわね」だったら、容易に理解できる。

だが広瀬スズと学生気分の組み合わせ、私特有なのかもしれないが全く理解不能だ。ちなみに後で分かったことだが、これを言った人は「変なことをわざという」妄言壁で有



## 瞑想録(その23)

名な人だと言う。この人自身も意味が分からずに言っていたのだ。だからもしかしたら、「脳波による以心伝心」がなかったのかもしれない。

しかしつらつら考えるに、初めて組み合わせた人物については事前の経験による本能の外延としての「物語テンプレート」が脳にできていないのだから、冒頭の理解できた例の方が不思議であって、私が瞑想すべきは広瀬スズの例の方ではなくて武田鉄矢の例の方かもしれない。

例えば人工知能に単語をランダムに選ばせて文法に合うように組み合わせると、大抵の場合意味は通じない。その意味では「広瀬スズのケースの方がよほど多くて武田鉄矢のケースは希だ」と言う物の見方だ。だがこれは正しくない。

人の脳はどの人も、同じような本能と似たような経験に基づいて育っている。だから我々は他人の言うことのほとんどが、賛成か反対かは別にして理解できる。特に言葉は形式知であって暗黙知よりも抽象化されているので、数字や数式に似たところがあって代入可能だ。

例えば最初の例でも、「林修先生は村上春樹を理解不能と言った」あるいは「武田鉄矢は三島由紀夫を理解不能と言った」等々、代入はできるがそのたびに意味と感想は、似ているが違ってくる。つまりこれらの概念の脳内位置が、近いが同一ではないのだ。これが言語における代入演算の実態だ。

つまり武田鉄矢の例の程度も応用理解できないようではでは、応用力がなさ過ぎて、物語化の目標である自己防衛の役に立たないだろう。日々生起する事物におよそ完全同一はないのであり、応用適用力があってこそ物語化テンプレートはその威力を発揮できるのだ。

だから以上をまとめると、武田鉄矢の例は脳の応用範囲内にあって、広瀬スズの例にはどうあがいてもどの既存のテンプレートも適用できないほどに意外だったということになる。それにしても広瀬スズのケースはどうして理解不能なのだろう。

自らを内省するに、どういう発想でどういう頭の構造をしていたらこう言うことを思いつくのか、およそ見当もつかない。もっと言えばこの発言の真意を知るために感情移入してはいけ~~ない~~のだ。あたかも頭が狂った人の描いた絵を見つめていると自分もその世界に引き込まれてしまうように、危険なのだ。そして脳がこの危険を察知して、これの理解を阻むように防衛本能が作動したとも考えられる。



ちなみに広瀬スズは映画の「ちはやふる」等で、何度も学生の主演を演じている。ましてやプロの女優だから、どんな役でもこなせるだろう。そして彼女は実際に学生ほど若い。でも彼女の「学生気分が抜けていない」、この発言の意図はいまだに理解不能である。

彼女の存在感はそういう形容詞とおおよそ背反なのだ。下手にこの発言に没入して自分の脳に新たな物語テンプレートを作ってしまうと、それは究極的には本能をかじって障害をきたす恐れがあり、脳にとってはむしろ故障の原因なのだ。

そして今日の瞑想の結論として思うことは、理解できないことはあっておかしいことではなく、むしろそのまま放置して忘れた方が身の安全であろうということだ。

### 16、絵画か論理か

「人の脳の働き方は絵画的なのかそれとも論理的なのか」と言う問題が、学問の世界でも結構問題になっている。もっと端的に言えば「脳の機能はアナログかデジタルか」と言う問題である。

例えば碁や将棋の名人たちが、ある時は場面全体を大局的に観ずる一方で、時として定石に従って論理的に打っていく。この切り替えと相互関係がどうなっているのか、摩訶不思議だと言うのである。確かに場面全体を見るには何メガビットも脳処理する必要があるし、他方で論理はビットこそ数わずかなもののなんとなく非人間的である。

数年前のことだがこの二律背反を解明するために、某大学が将棋連盟と研究協力協定を結んだと言う話まである。人の脳に電極を刺すとか生きたまま生体解剖するとかはできないので、一般に脳の研究は極めて遠回りにならざるを得ない。

だからこの「絵画か論理か」の問題を学問的に解決するのは、できるとしてもずっと先のことであろう。だが学問にこだわらずに自己の思考過程をちょっと振り返ってみると、結構見えてきたりする。もちろん「常に」と言った普遍性はないが。

人は日々山ほどのことを考えているので、この手の問題の瞑想にネタになる例は山ほどある。ここはその一例として、先日私が駅のホームに立っていた時の思い付きを挙げてみよう。ちなみに私の住所は横浜市であるが、どこに住んでいても似たようなものだ。



## 瞑想録(その23)

東京およびその周辺エリアの私鉄や地下鉄は乗り入れが多いために、同じ線に色々なロゴの電車が交互に入れ代わって走ってくる。例えば横浜市南部の上大岡の駅で、千葉県の田舎に本社がある北総公団線の電車を見ることがある。

先日も東横線の某駅で電車を待っていたら、東武鉄道の電車が入ってきた。自動車と異なって電車は軌道上を走っているので、うっかりミスと言うことはあり得ない。東武鉄道と言うと普通連想するのは、スカイツリーラインとか日光線とかなので、一瞬頭が混乱した。

そしてその時私の頭に瞬間に、都心都下エリアの路線図みたいな「系統図」が頭に浮かんだ。そして「スカイツリーラインが乗り入れているのは？」と考えてみた。だがこれは田園都市線であって、東横線ではない。臨時の回送電車かなとも思ったりした。

それでも基本に従って先の「系統図」に戻り、山手線外周辺の私鉄を時計方向にたどっていった結果、「東上線が副都心線経由で入ってきているのか」と分かった。この間10秒だろうか、思考回路をステップ分割するには十分に長い時間である。

まず指摘したいことだが、この時頭に浮かんだ系統図と言う「絵」が、動画的にリアルな路線風景でもなければ論理的な形式知としての文章でもないということだ。いわばその中間に当たる、路線図と言うトポロジックで形式的な絵だった。あるいは「具象画と論理のハイブリッド」と言っても良い。

この気付きをヒントにして折に触れて髣髴した自分の多くの気づきの過程を振り返ってみた。すると多くの場合にヒントとして頭に浮かぶのはやはり具象画でも素の論理でもない。それらが適当に混じった「半分絵で半分繋がり」みたいな「概景」だということだ。

世の中の特に認識学者は、論理と絵画を「背反的な全く別の媒体」と考える傾向がある。まあふつうの人でも、こう思い込んでいる人は多いかもしれない。だが他方で「二分法は愚か者の思考パターンだ」と言う指摘もある。現場の学問である化学でも、共有結合とイオン結合は概念的には背反だが、現実の結合はこれらのハイブリッドした混合中間型だと理解している。

そもそも人の思考は何のためにあるのか、その根本に戻ってみよう。本能が行う基本ソフトの存在理由は、自己保存であり危険回避だ。そのためには浮かぶ絵が「具象画



だろうか論理だろうか」などと言う問いはどうでも良いことであって、役に立つ絵が必要最小限だけ素早く浮かぶのが良いのだ。

もちろん安全かつ複雑な現代において、現代人が行う思考のほとんどは身の安全とは直接つながらないことだ。でも同じ脳が考えているのだから、基本は同じである。割合は事象ごとに異なるとは言え、ハイブリッドが具象画と論理の良いところ取りができるので、判断が早くて的確になる。

絵画か論理かと言う二項対立構造は、ホモサピエンスが後付けで思いついた愚かな二分法である。

### 17、数学と意味

先日の記事で「数字や数学は意味を完全に捨てきったそのかなたに存在するのであって、演算と意味は互いに背反である」と記した。例として「匂いが変」と「食べるな」は論理としては組み合わせが、演算は入り得ないことを挙げた。

これは今でもそう思っていて、撤回する気はない。ただ他方で数学が「新たな意味」を全く創造しないかと言うと、実は創造している。まあ一列に並んだ整数と平面は、「不定義用語」として既に有るとしよう。それでも人はこれらを基にして、掛け算を考え分数を考え有理数と無理数を考え、虚数と複素数を考え、円や三角形とそれらの諸定理を証明しと、どんどん概念の拡張をしてきた。

これらは見方を変えれば新しい意味の創造であるから、「数学も意味を持つ」ことになる。さらにその先には、関数や群の創案もある。これらは数学とは言いながら、従来の数字の拡張でないところで新たな意味を創造している例である。そしてこれらの基本的創造物の土台の上に、現代数学と言う巨塔は今も新たな意味を産みつつ聳えつつ成長しているのだ。

そうであるなら「数学と意味は背反」と言う先の宣言は間違いで、「数学にも意味はある」と言い換えるべきではないのではないか。さてここで注意すべきことがある。第1に数学は確かに意味を創造してはいるが、その意味同士の演算と言うことはありえない。つまり演算はほとんど新規創造されていない。



## 瞑想録(その23)

第2に、数学が作る意味は極めて内輪向きかつマニアックである。例えば「蹴り上げる」とか「甘辛い」とか「ビーフジャーキー」と言った日常用語が、その意味のままで数学用語になることはおよそ考えられない。この世と隔絶している。

第3に、これらの新規な意味は一般に新規であればある程、我々庶民の日常生活からかけ離れている。つまり先ず「数学と言うものは自分が豊かになる方向を進むべきだ」と言う強力な不文律がある。そして自分が豊かになることと庶民の日々に役に立つことは背反とまでは言わないものの、合致すると言うような調子の良いことはおよそない。

結果として数学は進歩すればするほど無用の長物、あるいはちょっと頭の良い子の知恵の輪に過ぎなくなっていく。もし数学が「志野や織部がなぜ美しいのか」を曲率等の概念で説明してくれるのなら、私は喜んで高等数学を学ぶだろう。志野や織部だって三次元空間内の多様体である。

ただ志野や織部をいくら見つめたところで、それらを土台に高度な理論ができるわけではない。当然に数学者はこれらに近寄らない。もっと数学者向けに説明する例には、ボロノイ図と言うのがある。平面上に有限個の点を撒いた上で、平面の各点を「撒いたどの点にもっとも近いか」で分割していくものだ。

ボロノイは極めて幾何的である。むしろ現代数学のトポロジーとかホモロジーとかよりも、よほど形の科学だ。しかもボロノイは有限要素法等に応用もある。それにもかかわらず「ボロノイにはこれ以上の理論が高まらない」と言う理由で、せいぜい応用数学の片隅に置かれて居るだけだ。

なおここで「応用」の意味について断っておきたい。高等数学が素粒子論や宇宙論に応用できる場合は多い。ただこれは応用とは言いながらその先も庶民の生活から現実離れしており、むしろ「数理科学」というより広い一分野の内輪でのやり取りに過ぎない。いわばお互いに買い合うだけの、場末の寂れた商店街のような自己満足なのだ。

いずれにしても良いか悪いかを別にして、数学と言うものは役に立つ方向でなくてより理屈がこねられる方向に進んでいく。そして今ボロノイ図に見たように、「高く理屈がこねられる」と言うのは、もう例外的に狭い門なのだ。ほとんどの「一見数学的対象」が合格しない。



## 瞑想録(その23)

ここで今日の結論に入る。そもそも①一列等間隔の整数と②まっ平らな平面と言う調子こきすぎの「超対称性」を出発点とし、かつ高い論理が組めるかと言う厳しい狭い門で篩をかけられたら、それでも残る分野はもう奇跡的に少ない。

だからそれら少ないものの間に「隠れた統一性」が見つかったとしても、それは多分に狭い門を抜けた者同士の共通原因(common mode failure)であって、単に従来はその共通性が「あったけれども見えにくかった」だけの話なのだ。数学にも大統一理論があって「ラングランズ予想」と言われている。今一番ホットな分野だ。

でもその本質とは数学を内からではなく外から見れば、実はこのような「共通原因もの」ではないかと思っている。そもそも数学の論理が証明できるというのは途中で余計な情報の追加がないからであり、つまり当たり前なのだ。結局数学者とは、当たり前の手品のネタ明かしに励んでいる人々なのだ。

ところでこのように当たり前の仕組みを明らかにできる「超天才」が、その人の能力をもっと現実の役に立つ、例えば医者とかあるいはモノづくりの工場現場とかに回らないのは、人類の資源の損失ではないか。私も若いころはそう思っていたが、今はそうは思っていない。

こういう特殊能力の人の多くは数学にしか向いていないし、他方で工場現場に必要なのは常識的な勤と軍隊規律であって、目から鼻に抜けるような気付きが必要な問題などおよそない。さらに現場とは、統一理論に拘るような潔癖症な人は返って邪魔な場所だ。

要するに「天才にふさわしい仕事」などこの世にないので、知恵の輪でつつましく遊んでいてもらった方がよほど無害なのだ。逆に言えば庶民が目目の前の問題を解くのに高等数学のような特殊な道具を使わなくて済むと言うのは、人類にとっての最大の幸運であるとすら言えるのだ。

数学なんて線形加速器も核融合実験炉も要らなくて安上がりなので、せいぜい励んでください。「手品の種明かしが趣味だ」とか「一生をこれに賭けたい」とかはいずれもその人の勝手であって、私は他人の趣味に口出しをするほどの野暮ではありません。それは私が、廃墟マニアや舟虫マニアをバカにしないのと同じです。

ただ私自身にはこういう趣味はないので、若い時の学科選択でも数学を希望しませんでした。



## 18、数学の大統一について

始めに断っておくが、私は数学については素人である。だから以下のまとめは厳密でない。「数学の大統一理論」と言われるラングランズ予想については昨日の記事でも少し触れたが、今日もう少し追加しておく。

最初に最近話題の啓もう書である、フレンケル著の「数学の大統一に挑む」の関係部分を自分なりにまとめておく。①ラングランズ予想は整数論、調和解析、保形関数とモジュラー形式(周期性)、リーマン面及び量子解析論の間に密接な関係があつて、大統一と言う大きな視点からまとめられることを予測したものである。

②そのより分かりやすい例としてはフェルマーの最終定理の証明に使われた、数論と3次元関数に関する志村・谷山・ヴェイユ予想がある。③更に分かりやすいアナロジーとしては、フィボナッチ数列のアイヒラーによる積関数の母関数表示がある。(引用書の抜粋は以上)

(以下は私の追加)思うにこの「数論と解析学等の大統一」の更に分かりやすいプロトタイプとして、高校数学で習う順列組合せがあるのではないか。順番を問わない組み合わせが何通りあるかは「C」で表す。これは整数の場合のみ意味を持ち解も常に整数なので、整数論の一部とも言える。

他方でこのCが高次関数の展開係数(二項係数)でもある。その意味でCは、数論と解析を結び付けている面がある。二項係数の場合はその相互の関係の底にある基礎原理が見えやすいが、これがもっと高度になって関係が見えにくくなったものが志村・谷山予想であり、さらにもっと広範囲に見えにくくなっていまだに完全に証明されていないものがラングランズ予想ということではないか。

この「見えにくい根っこが通じている」と言うその雰囲気は、おそらく二項係数の場合からある程度感じ取れる。その「底つながり」とは、①組み合わせはそもそも整数しか出てこないし、②関数の乗数も整数であり同じ関数を何回も掛けると言う意味において周期的だ、と言う点だ。

もっと大元を言えば今の数学が、整数列と平面と言う「超対称性」が無言の前提となっている時点で、すべての「対象定理」は既に予定されていると考える。以前も指摘し



## 瞑想録(その23)

たように数学の証明は演繹法だろうが背理法だろうが、新しい情報を追加していないから無条件に正しいのであり、その意味で当たり前である。

と言うことは統一理論と言っても、「根っこが同じである」と言う当たりの事の単なるネタばらしに過ぎない。たとえそれが世界の大天才が一生をかけてやっと解けるほどの難しい統一であったとしても、それは所詮のところ当たりの手品のネタ明かしに過ぎない。

「ネタのある手品だ」という指摘は、多分当たっているだろう。だが「当たり前だから証明すること自体が下らない」と言うのは言い過ぎだ。ここで参考に、隣分野である物理学の素粒子論の大統一を見てみよう。これは電磁力、弱い力、強い力、それに重力と言う4つの力を1つの理論で記述すると言うものだ。大エネルギー領域ではこれらの力が実際に未分化であると考ええる。

前3者ならSU(3)と言うリー群で統一できるが、重力の統一はGL(3, 1)リー群の性質が違いすぎるために、超弦理論に依っている。この統一を「当たり前」と言う人は居ないだろう。第一に4つの力のみ賭けが全然違うし、「なぜリー群のSU(3)なのか」と言う問いは自明ではない。「見てくれが異なる力がどう統一される」のが、ネタバレを聞きたいし普通に興味がわく。

この類推で、ラングランズ予想で数論と周期関数と多様体幾何と量子論が統一出来てそれが実は無条件にネタがあるとしても、元になる数論とか周期関数とか量子論等は全く別に見える。いわばなじみが深い領域では別物である。ちなみに前の記事で私は、「超対称性の上に高度な理論が構築できる」と言う希な場合は多分に共通原因がある」とまとめている。

これらに橋をかけるという作業は、ネタばらしであってもそのネタがどうばれるかは知的興味がある、少なくともそう思って人生をかける人が居ても、その人の趣味に因縁をつけるのは正しくないだろう。ネタがどうばれるかのネタバレ自体が、十分に神秘的なのである。

但し私はそういう趣味がないのでやらないし、思い起こせば学生時代に数学科に進まなかったのも、この「当たりに一生をつぶす」気にはなれなかったと言うのが、正直なところである。この辺は単に趣味の問題だ。能力の有無は別として。



最後に、冒頭に引用したフランケルの本に書いてあったが、「 $SO(3)$ のラングランズ双対は $SO(3)$ の二重被覆」だそうだった。これにはちょっとゾクゾクした。

### 19、数学と工学と検索

今数理科学で一番ホットな分野を概説したフレンケル著の「数学の大統一に挑む」については、数学には素人の私が言わば外から見た感想について、先日で紹介したところである。

そしてこの本を読んで私なりに再確認したのだが、やはり数学という分野は「完全一致の検索ツール」のようだと思う。完全一致と言うとさも潔癖そうで聞こえは良いのだが、実際は「1字でも違っていたらヒットしない」と言う意味で極めて融通の利かない、しかしソフトとしては組みやすい代物である。

一応断っておくと完全一致検索にもそして数学にも、「広がりや応用が全くない」と言う訳ではない。例えば検索対象の文が「明日は朝早く起きる」だとしよう。この時に「明日」や「早く」と言った検索ワードならヒットするのはもちろんだが、「日は朝」と言った意味のないキーワードでもヒットする。これはある意味での応用動作である。

数学だって少なくとも定理の予想についてはひらめきの有無が決定的であるし、証明の過程でも今までになかったより一般的な概念の提案がしばしば必要となる。ただしその「新提案」は、それ以前の全数学と矛盾しないのが絶対条件だが。

さてここで話を検索に移して、「グーグル先生」を見てみよう。この検索ツールでは少しくらいキーワードが間違っているけど、「〇〇で検索しています」などと表示して、より正しいと思われるキーワードを推定して優先適用してくれる。まさに先生なのだ。

先日もうっかり「いきものががり」と入れて検索してしまったが、ちゃんと「いきものがかり」を優先キーワードに検索してくれた。もっと柔軟な例では、「新横浜のプール」で検索したら、音は全く似ていないのに目的の「日産ウォーターパーク」が1番にヒットしてくれた。

このような応用技ができるには、キーワード間の類似の程度を推測するとか優先順位を決めると言った一種の蓋然推論手法が必要だ。だが数学は証明の途中で余計な情報が混入しないから証明が完全になるのであって、推測行為はご法度である。



## 瞑想録(その23)

こういう切り口で見ると数学と言う分野が極めて広範な沃野の内の、高度な対称性と双対性を持つ、例外的な程に特殊な部分しか掘っていないことに気付くだろう。この対称性と双対性を旗印として、数学と言う分野はこれまでどんどん高くそびえてきた。

では核物理でない核工学の場合はどうだろうか。核工学の場合は目的が物作りだから対称性のある調子の良い場合だけを見ていると目的はおよそ達せられない。そこでひたすら地味にジリジリとスペクトルを測定して、その結果をビッグデータとして持つことにしている。

核工学ではそのデータ表内の必要な数字列に、加減乗除程度の幼稚な演算をして、寸法や形状や物性値を出しているのだ。対称性にこだわりすぎるのも幼稚じみているが、他方でこれだけ泥臭い作業もあまりに知恵がなさすぎる。泥臭すぎて知恵の入れどころがないのだ。

人の知恵が一番にかつ現実的に発揮できるのは、ある意味核物理と核工学の中間の、ゲーグル先生のように付加情報によって効率良く耕す沃野を広げる方法であろう。核工学のやり方は、やせた土地も同じ力みで耕す愚かに当たっている。

ただし核物理も核工学も学問に認定されているが、ゲーグル先生方式は恣意性が入るので学問に認定されていない。でも経験上分かるだろうが、ゲーグル先生の部分にしばしば最もおいしいところがあるのだ。この意味で学問一般は、一番スリルのある所をことさらに禁忌にしている。

最後にフレンケルの本の最後の章にある大胆な試みについて、やはり外野から一言コメントを入れたい。フレンケルはその本の最後の章で、「愛の公式をテーマにした映画を作った」ことを話題にしている。もちろん科学とは違う芸術であることを断った上の話であるが。

そしてその映画製作の際に三島由紀夫の代表作である「憂国」の、三島自身の監修による映画版を参考にしている。憂国の舞台は二二六事件の直後で、そのテーマは「極限におけるエロスと死」である(ラムール・ラモール)。これはなかなか三島らしい。

さてここでフレンケルは、「テーマ自体には賛同しないがその映像の簡素な美意識に感動してヒントにした」と語っている。他方でフレンケルは、数学理論の指導原理は



## 瞑想録(その23)

「対称性と双対性」にあると主張している。そして三島の憂国における主張とは即ち、「極限における愛と死の双対性」であると私には見える。

この点に気付けなかったフレンケルは惜しい。天才ではあってもやはり数学者で、融通はなかったか。

### 20、読書に関する素朴な疑問

私はここ何年か、平均で2週間に5冊の本を読んでいる。それも自分の意志で、面白そうな本を探した上でのことだ。仕事のためとか単位のためとか、そういう強制によって仕方なくではない。

そして読んだ本は結構な割合で、自分のライフワークである「素朴な疑問と意外な気づき」の瞑想のヒントになっている。現にこの様に、週平均2本の記事をアップできているのだ。だがそれでも依然として私は、読書と言う行為に今一つ懐疑的である。

特に懐疑的なのは、そのコスパについてだ。本を読むと言う行為は結構頭と時間を使う。ちなみに私は同じ本を原則として、1日に30ページ以上読まないことにしている。さもないと私の頭ではオーバーフローして、未消化になってしまうからだ。

振り返ると1回に借りる本5冊のうち3冊は、「何らかの読んだ価値はあった」と思える。それでも「知識1つを得るのにこれだけの労力と時間が必要なのか」と、あきれる。そして「今の人類は意思疎通手段に枯れているのかな」と、素朴に疑問に思えてしまう。

単に見るだけなら、本より絵の方のコスパが遥かに良い。だが絵の場合は「論理や事件順序や事情の詳細を知る」と言う目的に限れば、かなり限界がある。もちろん絵や写真の方が優れた場面も山ほどあって、人の顔とか景色の美しさとか、言葉では言い表せないものが一目瞭然である。

SNS媒体の変遷が、人の指向の良い例になる。最初はホームページから始まったが、ブログ、ツイッターと順次1記事当たりの字数が減っていき、ついに今や見るだけの、ピックアップやインスタが全盛期の時代だ。多くの人が、わざわざ面倒な字なんか読みたくないのだよ。



## 瞑想録(その23)

その意味で画像は究極だ。これはもう革命と言ってよい。ピクシブやインスタの先に何があるのか、およそ見当もつかない。そしてその革命が起きた後なのに依然として文章にこだわる私とは、時代遅れも甚だし過ぎなくないか。

一言断っておくと私の読む本の9割は教科書的な本、つまり何らかの知識や新世界を得るのが目的の本である。多くの人がそうであるような、時間つぶしや娯楽のための小説はほとんど読まない。いわゆる活字中毒者ではないのであり、もっと効率的な手段があれば直ちに切り替える。

ちなみに私は、娯楽や娯楽小説をバカにしていない。娯楽小説も現実ではありえないような、物理法則や因果律を無視した心象を描いていると言う意味で、大いに価値がある。ただ残念ながらそこまで奇想天外で、心理学の教科書にもなりそうなほどの物語に出会ったことがない。強いて言えば星新一のショートショートか。

そう言う訳で私は今日も、「現生人類は未来人間から見たらチンパンジー程度だろうな」とか、あるいは「現代人の読書って2000年前に竹簡に文章を書いていたところからほとんど進歩がないよな」とか思いつつも、「取って代わるより良いメディアがない」と言う理由だけで本を読んでいる。

そしてそんな私がもっと驚くことは、この「字より絵」の時代になってもなお、「小説の創作で何とか名を成したい」と志している人が掃いて捨てるほど居ると言うこの事実だ。次々に新しい小説本が出版されているが、出版してもらえただけまだ勝ち組なのだ。

先日試しに、文芸春秋社が毎年選考している「文学界新人賞」の過去20年の受賞者について、地元の図書館に何か在庫作品があるか検索してみた。この賞は新人賞の中では結構知られた賞だ。その検索の結果1冊でもヒットしたのは、芥川賞も併せて取っている女性ただ1人だった。

毎年1000作くらい応募があって、その中から選ばれたのだからその作者は相当の才能があるのだろう。それでもそのほとんどの人が一発屋で忘れられ、代わりをやる作家志望者はいくらでも居るのだ。中にはコンビニのバイトなどで、苦勞しながら小説に賭けている人も多いだろう。

新人賞と冠する賞も5種くらいあるし、もっと有名な文学賞も山とある。そしてそのそれぞれの賞に応募する人たちも、賞1つ当たり数千人くらい山ほど居るのだ。日本語だ



けでも毎年これだけの小説が生み出されている事実には、ただただ驚くしかない。本当にそこまで文章に魅力があるのだろうか。

そして後世と言わず「10年後に残っているのはほんの氷山の一角」と言う程の厳しいしのぎを、その趣味の人々は写真時代のいまだにやっている。ある意味豊かすぎる時代なのだろうか。私には彼らの心情は分からない。

### 21、ハザール王国

ハザール王国は学校でも習わないしあまり知られていないが、7世紀から10世紀にかけて中央アジアのコーカサスの北の、今で言えばロシア連邦のダゲスタンからアストラハンあたりに栄えた遊牧民族国家である。そしてこの国の一番の特徴は、ユダヤ教を国教としたことである。

一般に中央アジアは民族の興亡が激しくて短命な中小王国の宝庫であるが、個々の国の詳細については分かっていないことが多い。それは彼らの多くが遊牧民族で定住しなかったために遺跡も少なく、文字も持たないために記録も残っていないせいである。

ハザール王国が最も栄えた8世紀ころを世界で同時代史的に眺めてみよう。日本なら奈良時代、中国なら唐の時代でちょうど安史の乱が起こったころ、ロシア大公国はまだ形がなく、西の大国としてはビザンツ帝国(東ローマ帝国)、南東にササン朝ペルシャと言った感じだ。

このころシルクロードはあったがまだ交通の便が悪く、ハザールはその中間点的位置にあった。民族的には「西突厥国から分離独立したチュルク系」と言うのが、定説になっている。また「この国がコーカサスを塞いでいたおかげで、イスラム教が今のロシアや東ヨーロッパまで拡散しなくて済んだ」と言う評価もなされている。

この民族が残したのは他国のユダヤ教徒に宛てた数通の手紙と、いくつかの遺跡だけだ。石碑もなければ墳墓も盗掘され、また自らの歴史書も残していない。わずかに残る資料は当時周辺国だったビザンチンやキエフ大公国やペルシャ等の文書に、断片的に記されている程度だ。だからその詳細はほとんど解明されていない。

興味に惹かれるままに最近、「ハザール\_\_謎の帝国」(城田俊訳)なる本を読んだ。そしてこの本は通常の科学教科書と同様に、学問的に確認できたことだけをいかにも



## 瞑想録(その23)

「全てわかっている」かのような体裁で、滑らかに繋いで書いている。一見するとあたかも、一連の完結した歴史書を読むかのようなのだ。

だがその実、私のような素人の読者が普通に感じるごく常識的で素朴な疑問、例えば①その王国がどのように勃興して、②どういう理由でユダヤ教を選び、③どうやって正統ユダヤ教を輸入学習したか、と言った問いにはほとんど答えていない。学問的な根拠がないせいだ。彼らは推測でものはかけない宿命を負っている。

さらには、④国としてどんな統治機構と軍政を敷き、⑤統治者や主要な大臣は誰であって、⑥普段は何を食べてどんな家に住んでどんな暮らしをしていたか、⑦どのような工芸修飾品を作ったか、そして⑧最後はなぜ滅んでいった滅んだあと人々はどこに行ったのかと言った、基本的なところにはほとんど答えていない。

加えて⑨男系社会か女系社会かも分かっていないし、⑩王の名前は列挙されているものの個々の統治年間と主要な業績についてはまるで書かれていない。邪馬台国とか古代ギリシャとか南洋諸島とかそういう「大昔の」国は多いが、ハザール王国はむしろ渤海国やイルハン国を連想させる。

学術データやヒントがなさすぎる文字通りの謎の国だが、だからこそ余計に知りたくもなると言うものだ。中でも特に知りたいのは、ユダヤ教の受容過程である。ユダヤの地に近くもないし、このころにはユダヤ王国はとっくに滅亡して本来のユダヤ人たちは世界中にディアスポラ(離散)している。

ところが彼らが行っていたのは、正統ラビの指導がなければおよそ不可能な、かなり厳格なユダヤ教であることが手紙で分かっている。そのラビ集団たちがどこから来たのかは、知る由もない。ユダヤ教を受容したきっかけも、「夢でお告げがあった」と言っただとおとぎ話しかない。

まあ一旦こういう国ができてしまえば、イラン等に離散していたユダヤ人たちは集まってきたことだろう。交易中継も行っていたようなので、ある程度近隣との交流はあったのかもしれない。それにしても伝道に不熱心な民俗宗教であるユダヤ教が、遠隔の地に突如出現する様は異様である。

さらにはハザールが成立する前にこのエリアはどの国の支配下にあったのか、またそれをいかにして脱却したのか等々、歴史学と言うものの難しさの典型例みたいな国



である。学問として難しいのなら誰かが小説でも書けば面白いと思うのだが、そういう本も寡聞にして聞かない。

少なくとも古典ヘブライ語は書けたし、突厥文字の変形判も持っていたと言う噂はあるのだが、先に言及した「王国末期の当時アッバース朝の宮廷の重臣であったセファルディ系ユダヤ人にあてた手紙」以外の文書は、一切残っていない。交易をしていたなら、契約文書は必須だと思えるのだが。

このエリアをハザールよりも千年も前に支配したスキタイ族の方が、まだ工芸品や武器が残っている程だ。地元の図書館や美術センターのOPACを検索しても、まるでヒットしない。いずれにしても興味とは反対に、歴史学あるいは学問一般の原理的限界を教えてくれる国である。

## 22、物語化

以前に、「ポケモン800個の特性や技は全部言えても、元素の最初の20個すら言えない人が多い」と言う矛盾を指摘した。似たような例で、歴史で年代を覚えるのに、「一味散々北条氏」などとことさらに語呂にすると覚えやすいことも指摘した。

こういう例、つまり「表面的な情報量を増やした方が返って記憶出来て身に着く」と言う一見の矛盾の実例は多い。これらの点は矛盾と言うよりもむしろ、「人の脳構造を法則的に示している」と言うべきだろう。そしてその法則とは名付けるならば「物語化」である。

特別に関連や手掛かりがなくて脳内に位置のない形だけの丸暗記よりも、すでに脳内に位置のある類似のあるいは関係のある知識や物語を足掛かりにして、単立の知識としてではなく物語にしたひとまとまりの知識として覚知した方が、情報量はともかく人の脳には親和性が高いのだ。

「遊びながら覚える」と言うのも似た構造で、楽しいと覚えやすい。これも楽しいという感情に付随して、物語が生成あるいは想起されやすいからだ。そしてこの物語化のさらに根っこは、私がしばしば繰り返している人の本性であるところの、本能に行き着く。

つまり人はそもそも本能と言う基本ソフト付きで生まれてきている。これが自己防衛や生存の基本能力となり、成長とともにさらに発展していく。そしてこの「さらに成長」の



## 瞑想録(その23)

部分だが、本能のすぐ外側に「外堀的な部位」が、基本的に体験や学習によって後天的に発達するということだ。

その部位はその人の体験等のエッセンスを抜き出して順序化した物語として、その人の本能の外側に定着する。大人になるにつれて経験則は増えていく。それも言わば物語の複雑化と発展であって、その本質はあくまでも物語あるいはテンプレートなのだ。

この物語化と言う人の脳に特異的な作用については以前にも説明なしで用いてきたが、上記の生成プロセスと役割を意味していた。そして物語の方が定着しやすいのは、物語が本能の近くにあってかつ親和性が高く、自己保存の安心感と通底するところがあるからだ。

個々の物語は脳の深層部分にあるからなおのこと、形式知でなく暗黙知として定着する。暗黙知には「メタな一般法則」の面があって、しゃくし定規でなくより本能と同様に、弾力的に高い応用自由度をもって定着しておりかつ作用する。

深い暗黙知である以上は言葉にしにくいのであるが、そうばかり言っていては個々に瞑想するしかなくなる。そこで限界はあるのだが、脳の働きをかなり反映していると思われる、文章やさらには文学や小説に目を向けてみよう。物語化暗黙知の言わば幾何的構造を見たいのである。

そうすると分かるように、人の心はちょっとしたことにも反発したり偏愛したり等々複雑怪奇に入り組んでいて、心の働きはおよそ平面的ではない。むしろ「何段にも入り組んで捻じり回っているのが実像だ」と感得できる。この観点は重要である。

つまり細かい捻じれを表現しようとすれば、いくらでも深く細かく捻じれるものである。心象空間はいわば、無限個の蟻地獄あるいは不規則な螺旋階段の山ようにできているのだ。こんな描像は、数字や数学とおよそ相容れないところにある。

こちらの方が脳空間のリアリティーである。こちらを鏡として数学に用いられる整数列や平面を見ると、あまりにのっぺりしすぎていて考えられないほどに非現実的であることが見えてくるだろう。そしてこの非現実の上に、高く積み上げられる土台だけ選んで上物を作ったのが、数学である。



## 瞑想録(その23)

これまで何度か数学の、「高度に論理的ではあるが日々の役には立たない」様に言及してきた。それは一重にこの「猛烈に食い込んだリアリティー」を念頭に置いて、言及してきたものである。このリアリティーを正とすれば、数学の描像は明らかに不自然に、幼稚なほどに理想化されすぎている。

ただこのリアリティーにも「難点」はあって、複雑すぎて何の法則もおおよそ見いだせないことだ。だからここまで複雑にしなくても、当面は本能の近くにあってより単純な「物語」を基に、何らかの蓋然数理なり類型は見いだせないだろうかと思想している。これは新数学につながる可能性がある。

その一例となるかは分からないが、人はなぜか年を取るにしたがって、余韻を楽しむようになる傾向がある。若いころはスパッと割り切れる論理が肌に合った人も、年を重ねるにつれて盆栽や水墨画のわびさびにこよなく愛着を持つようになる。

これもおそらくこの余韻とかわびさびの緩さが、人の脳の本来に近いからであろう。別の言い方をすれば人は次第に形式知から暗黙知の世界に引き込まれていくのだ。あるいは年を重ねて危険をさほど恐れなくなると、自己安全にこだわった部分の物語化の世界の束縛が緩んで、自由になるのかもしれない。

そもそも効率と反対の、遊びの多いゆとりのある日々の方が心地よい上に、そのゆとりを通じて暗黙知レベルで自由に物語を脳が「妄想」する。これが人の極楽の境地ではないか。

### 23、形式知と暗黙知

本日は形式知と暗黙知について見る。具体的には①暗黙知はより本質的だが語れないのが致命的だ。②不十分だが形式知に頼るしか方法がなくこれは現生人類の痛恨の欠点だ。③形式知はもとより暗黙知であってもしばしば該当がなく欠損が生じると言う点だ。以下いくつかの例で示す。

「このタイ焼きは少し甘すぎだね」「そういう商品って多いでしょう」「それはまあそうだけど・・・」。この例では特定のタイ焼きについて指摘したのに、一般論に置き換えられている。両者の暗黙知の位置は、近いが少し異なっている。でも言葉と言う形式知によるこれ以上の違いの表明は面倒なので、不満足ながら文句も言えない。



## 瞑想録(その23)

「どうしてカーテンを開けたまま寝ているの」「いつもこうやっているよ」「あ、そう」。この例ではまともに理由を答えていないが、質問者は妙に納得して矛を収めている。論理的には不整合だが、暗黙知の位置が微妙に合っているということだ。

「あれ、このエリアはいつから変わったのだろう」「いつかは知らないけれど結構最近だよ」この例で分かるように、「結構」とか「最近」とか言ったあいまいな言葉も現実には必要なのだ。互いに納得したつもりになっていて満足しているから、両者の暗黙知の脳内位置がずれていても円満解決じゃないか。

「そういう人って結構居るよね」「結構と言う程でもないように思うけど」。この例は、「曖昧な言葉にもそれなりの支配領域や限界がある」という、アナログの基本の例です。

「今度デйкаセンターを設立するのだけれど、施設名を考えてよ」「ホトギスなんてどうかしら」「まじめに言っているのか?」。この例はホトギスが漢字で書くと「不如帰」であり、デйкаセンターとしては縁起が悪い(笑)。

「どうしてバスの中での飲食はダメなの」「バスをちょっと考えれば分かるだろう」。この例を具体的に理由で言えば、「バスは電車より揺れるし客が入り組んでいるし運行距離も長くないから」だ。でもこのケースはちょっと「バスに乗っている自分」を、暗黙知としてイメージすれば自ずと分かることだ。

(詐欺サイトの見分け方の1つのポイントとして)「中華フォント全開」。この例は蓋然論理だが、ここにおける「全開」と言う言葉の使い方が、いかにもツボにはまって上手い。暗黙知として憎いほど合っている。

「今回の事件は日馬富士に引退してもらうのが一番だ」。常識的にこれが八方を丸く収める落としどころで、本人も分かっている。似た例で西南戦争の時に山県有朋が、「西郷さんには世話になったが、ここは西郷さんに自決してもらうのが一番だ」。

一節太郎の「浪曲子守歌」、この歌は私も好きで風呂で良く歌う。良く聞くと、「女房が逃げちゃったのでお乳を欲しがる赤ちゃんに子守唄を歌ってやる」という意味の歌詞だ。でもお腹が空いている赤ちゃんは、歌なんか聞いても全然嬉しくない。この矛盾にある日突然に気づいた(天から降ってきた)。

「私ね、その時バスに乗ろうとしたの、そうしたら急に割り込んでくる人が居てね、だからやんわりと注意したらその人が逆切れしてくるの、ちょっとやくざ風で怖かったけど



## 瞑想録(その23)

勇気を奮ったのね、そうしたら……」と延々と続く。意味を理解しようとする前に、「この話は理解する価値がない」という判断が先に出た。

バスの運転手に「ハイ右折」とか「次のバス停で停車」などと声をかけるのは、たとえそれが正しくてかつ親切であっても、気が散って迷惑だ。脳の構造がそうになっていると言うことだ。

「老人になると足腰が立たなくなって運動ができなくなり、内臓が弱って死期を早めるのだよな」「それでは若いころから車いすの人はどうなるのでしょうか」「そう言えば分からないね」。人が自然に分からないこともあるのです。

「下らない」の反対は「下る」ではなくて「下らなくない」、あるいは「大切な意味がある」。形式知であっても、ちょうど良いところに適切な単語がないこともある。似たような例で今「ナウい」は死語だが、これに代わるズバッと決まる言葉もない。また「いきものがかり」のジャンルも「J-POP」では広すぎるし、「フォークバンド」では古臭いし、「邦楽」と言うのも違うし、ないですね。

暗黙知の形式知化はあたかも、「すべての小数を整数で言いなさい」と言っているようなものです。原理的に無茶です。

### 24、トイレの順番待ち

公衆トイレの順番待ちで、泣きそうな女の子が入ってきたので「お先にどうぞ」と譲った人がニュースになっていた:

<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20171202-00000006-jct-soci>

大方の評価は「優しい人だ」とか「格好良すぎる」とかだった。だが列の後方に居て、「勝手に譲るな」と怒鳴った人も居たそう。そしてこの人に対しては、「狭量に過ぎる」とか「女の子がかわいそうと言う気持ちすらないのか」と言った感情的な悪評が並んでいた。

ちなみにここで話を明確にしておくと、譲った先頭の女性は正確には譲ったのではなくて自分の前に入れてやったのである。だから「勝手に譲るな」と言う声も良いか悪いかは別にして、全くの事実無根ではない。

ここでやってきた女の子は1人だけだったが、次々に10人も来たら、この女の子は果



## 瞑想録(その23)

たしてどうしたのだろう。また泣いて入ってきたのが女の子でなくて、大人のおばさんだったらどうしただろう。そして周りの人の反応は？

この問題は多様な面を有していて一見複雑に見える。だが実は極めて簡単に整理できる。その先頭の女性が女の子を自分のすぐ後に入れてやって、自分が用を足したすぐ後にその女の子が入れるようにしてやればどうなるのか、考えてみよう。

おそらく人々の感想は、「その先頭の女性にそんなことをする権利はない」とか「勝手に入れるな」と言う文句は当然だ」と言う感じになるだろう。でも最初の例とこの例では、先頭の女性と女の子の順番が入れ替わっているだけで、あとは何も変わっていない。

要するに状況はほとんど変わっていないのに、人々の感情と反応は真逆になる。これは矛盾だ。後の例で「文句はもっともだ」と思うなら、先の例でも「文句はもっとも」となるべきではないか。列の後ろの人は全員が1人分余計に待たされるのは同じことだから。

これは極めて数学的な思考実験である。数学的思考法もこういう風に用いるならばあるいは世の中の役に立って、「学ぶ価値がある」と言う評価になるだろう。

それではさらにバリエーションを考える。もしこの先頭の女性が列の後ろの人々に向かって、「このかわいそうな女の子に入ってもらってよいでしょうか」と呼びかけたらどうだろう。呼びかけて同意を求める、これは一見民主主義的で極めてフェアに見える。

だが実はこういう形を作られてしまうと、人は表立って反論できなくなるものだ。最初の例で「勝手に入れるな」と怒鳴ったおばさんも、大勢の一人だったからできたのであって、こういう形にされると目立つのが嫌で黙ってしまうだろう。

つまりこの一見「極めて民主的」な例は、実は民主を隠れ蓑にした言論封殺魔のやり方なのだ。同意を求めた先頭の女性はそこまでの悪意はなくて、あくまでも民主主義の模範を垂れて見せただけなのかもしれない。だが結果的には同じことだ。民主主義の時代である今、こういう例は実は多くある。

では本当の正しいやり方とはどういう方法か。それは先頭の女性が女の子に自分の権利を譲って、自分はあえて列の最後尾に回ることだ。これができない、とても我慢できないとかバカバカしいと思うなら、そもそも「女の子に譲る」などと言う一見「愛の行



## 瞑想録(その23)

為」などする資格がそもそもない。

今この例で見たように、本当の客観的正義や感情の在り方については、ちょっとした頭の切り替えと思考実験で炙り出される場合が多い。これこそが真の知恵ではないか。ところで知恵と言え、旧約聖書にしるされたソロモン王の知恵が有名である。以下がその概要だ。

ソロモン王に「その子は自分の子だ」と主張する女性が2人現れて、奪い合った。そこで王は「それならこの子を刀で2つに切って、半分をそれぞれに渡そう」と言った。一人の女は「公平にそうしてください」と言い、もう一人の女は「切らないでください、私はあきらめます」と言った。そして王は「本当の母は後の女性である」としてその子を後の女性に渡した。

以上が知恵の象徴として有名な話である。だがここで「切ってください」などと言え、実の親でないことがばれてしまうなどと言うことは、それこそサザエ程の低能でも見破れることだ。だから普通は嘘を承知で「切らないでください」と泣き叫んで見せるだろう。

この話に比べれば冒頭のトイレの順番の話の方が、よほど真理のありかに気が付きが必要で、遥かに知恵の働かせ方の好例になっている。たった2人の順番を変えるだけで、全容が見えてしまうのだ。ソロモン王の話を聞かずに、「あの知恵のユダヤ人がこの程度のエピソードしか作れなかったのか」と、不思議にさえ思える。

2017. 12. 27